



# ヘルメスの翼に

—小樽商科大学FD活動報告書—

## 第15集

### 目次

まえがき

部門長挨拶

第1章 商学部

令和4年度「授業改善のためのアンケート」集計結果報告

第2章 大学院商学研究科（現代商学専攻）

令和4年度 大学院FDアンケート集計結果報告

第3章 大学院商学研究科（アントレプレナーシップ専攻）

令和4年度「授業評価アンケート」集計結果と分析

第4章 令和4年度CGS教育支援部門の活動状況

令和4年度CGS教育支援部門スタッフ一覧

小樽商科大学グローバル戦略推進センター教育支援部門

(2022年度)

まえがき

本報告書「ヘルメスの翼に—小樽商科大学FD活動報告書—第15集」は、令和4年度におけるグローバル戦略推進センター教育支援部門のFD活動をまとめたものです。

本学におけるFD活動は、平成12年度より教育課程改善委員会のもとに設置されたFD専門部会を実施主体として活動を続けてきました。その後、本学におけるFD活動を組織的に展開するために、教育課程改善委員会を発展的に解消しその機能を継承する教育開発センターが平成16年4月に設置されました。

平成19年度に教育開発センターの組織が改編され、FD活動は、学部におけるFD活動を「学部教育開発部門」が、大学院現代商学専攻におけるFD活動を「大学院教育開発部門」が、また、ビジネススクール（専門職大学院）である大学院アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動は「専門職大学院教育開発部門」が実施主体となり展開されています。

FD活動を通じてより質の高い教育を実現するために、本学教職員、学生、関係者の忌憚のないご意見を教育支援部門にいただければ幸いです。

本報告書の表題「ヘルメスの翼に」は、本学の学章（シンボルマーク）「ヘルメスの翼に一星」から取ったものです。本学ホームページによると、学章について次のように説明されています。

この学章「ヘルメスの翼に一星」は、商業神ヘルメスの翼の上にある一星が、北の大地から英知の光を放つ様子をあらわしたものです。下のリボンには、1910年の創立とOtaru University of Commerceの頭文字が示されています。

ヘルメス(Hermes)は、ギリシャ神話の神の一人で伝令の神、また商業、学術などの神とされています。ローマではマーキュリー(Mercury)と呼ばれています。ヘルメスは2匹の蛇がからみついた翼の杖をもち、伝令の神として世界を飛翔しています。一星は、本学の前身である小樽高等商業学校以来、本学のシンボルとして用いられてきました。「北に一星あり。小なれどその輝光強し。」と謳われた本学の伝統を象徴しています。

FD活動を通じてより質の高い教育が実現でき、それによってヘルメスの翼に輝く一星がより強く光り輝くことを願って、本報告書の表題を「ヘルメスの翼に」としました。

本報告書は「学部教育開発専門部会」、「大学院教育開発専門部会」及び「専門職大学院教育開発専門部会」が中心となって作成したものです。どうぞご覧ください。

令和5年7月

2022 年度（令和 4 年度）は、グローバル戦略推進センター（以下 CGS）教育支援部門にとっていくつかの節目を迎えた年となりました。まず 2022 年 4 月より本学（を含む国立大学法人）が第 4 期中期目標・中期計画期間に入り、CGS 教育支援部門は第 3 期中に重点的に取り組んだアクティブラーニング手法の開発と評価から、「教育の質保証」へと活動の重心を移していくこととなりました。また同時に北見工業大学、帯広畜産大学と本学の法人経営統合によって北海道国立大学機構が発足して、教育研究その他幅広い分野での三大学連携と協働が強く推進されることとなり、教育改善活動においても各大学の教育内容の独自性を尊重しつつそれぞれの取組や成果を共有してさらに深化を目指していくことが確認されました。さらに、2020 年度から続いた感染症対策が概ね収束期に入り、この間 CGS 教育支援部門が対応してきた LMS の全学的活用やオンライン授業の技術支援ならびに学生による評価を通じてノウハウや知見が組織的に集積されました。本稿執筆時点の 2023 年前期においては対面授業／教室受講の制約を原則的に解除しましたが、オンライン活用も含めた新たな教育手法が一定程度定着した事実を踏まえると、今後の FD・SD 活動はさらに多くの可能性と課題を有することが明らかと言って良いでしょう。CGS 教育支援部門が、その前進となる教育開発センター（さらにそれ以前の教育課程改善委員会）より長らく担当している全学 FD・SD 活動においても、従来の取組成果を踏まえ、またそれらとの継続性に配慮しつつ、順次見直ししながら展開していくこととしております。

さて、今般取り纏めた「ヘルメスの翼に～小樽商科大学 FD 活動報告書～（第 15 集）」は、2022 年度の教育改善活動の成果を報告するもので、従前の三部構成（商学部、大学院商学研究科現代商学専攻、大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻）を踏襲しています。詳細は本編に譲ることとし、いくつかの要点を抜き書きます。

商学部の「授業改善アンケート」において、オンライン授業の継続的運用を想定した「受講形態」の設問を設け、学生の満足度等を汲み取る工夫をしました。また従来「要改善点」が主であった自由記述欄に「良かった点」の表示を追加し、試行錯誤する教員にとって気づきが得られるように配慮しました。この変更は定性的／定量的に一定の手応えを得たものの、他方でアンケート回収率の低下（前年度比約 5 ポイント減、前々年度比約 20 ポイント減）は大きな課題と言えます。仮に受講学生の授業へのコミットメントの低下が要因であった場合、アンケート分析の解釈も限定的なものとなり、教育改善の取組みそのものの在り方も議論の必要性を増すこととなるでしょう。

大学院現代商学専攻においては、博士前期課程・後期課程ともに少人数教育ゆえの丁寧な研究指導が継続されており、概ね前年度までと同様の傾向が示されたようです。科目選択の自由度が低い状態にあることは、研究指導担当教員の偏りとも整合するもので、長期的に対応が必要となる課題でしょう。

大学院アントレプレナーシップ専攻においては、授業改善アンケートは高い回収率となっており、これを踏まえた分析結果もより具体的なものとなっています。平均して高い満足度を維持しつつもやや低下傾向にあることを踏まえて、着実な改善の方向が整理されています。

さらに、コロナ対策の期間中に低下した教職員のコミュニケーションの質と量の回復を意図して 2022 年 11 月に全教職員を対象とした FD ワークショップを開催し、教学 IR 室の協力を得て、多様な切り口とデータを用いて本学学生の入学時から卒業後までの姿を共有しました。教育改善活動における教員間の情報共有や教職協働体制の重要性を再度確認して、今後もこのような取り組みを継続して全学的な FD・SD 活動を充実させて参ります。

# 目 次

まえがき

部門長挨拶 . . . . . 教育支援部門長 大津 晶

## 第1章 商学部におけるFD活動

令和4年度 「授業改善のためのアンケート」集計結果報告 . . . . . 5

### 1. 調査の概要

1.1 調査の目的

1.2 調査の方法

### 2. 授業改善のためのアンケート調査結果

2.1 実施状況

2.2 回収状況

2.3 評定値

2.4 自由記述

### 3. まとめ

## 第2章 大学院商学研究科現代商学専攻におけるFD活動

令和4年度 大学院FDアンケート集計結果報告 . . . . . 15

博士前期課程学生対象(調査の概要、実施方法、回答状況、集計結果)

博士後期課程学生対象(調査の概要、実施方法、回答状況、集計結果)

## 第3章 大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動

令和4年度 「授業評価アンケート」集計結果と分析 . . . . . 26

### 1. はじめに

### 2. アンケートの概要

### 3. アンケートの分析

### 4. 各科目の成績分布

### 5. 各科目の集計結果

### 6. まとめ

授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価(令和3年度後期科目、令和4年度前期科目)

## 第4章 令和4年度CGS教育支援部門の活動状況 . . . . . 52

令和4年度CGS教育支援部門の活動内容

令和4年度FDワークショップ「データで見る小樽商大生～入学から卒業まで」

令和4年度CGS教育支援部門スタッフ一覧

## 第1章 商学部

令和4年度「授業改善のためのアンケート」

集計結果報告

# 令和4年度「授業改善のためのアンケート」集計結果報告

## 1. 調査の概要

### 1.1 調査の目的

本学の授業の改善活動の一環として、履修者による授業改善アンケートを実施する。アンケート調査は、グローバル戦略推進センター教育支援部門学部教育開発専門部会で実施する。アンケート調査の実施後は、学部教育開発専門部会で集計・分析し、本学のFD活動報告書「ヘルメスの翼に」およびグローバル戦略推進センター教育支援部門のwebサイト上で公表する。ただし、集計したデータは授業科目が特定されるような公表は行わず、授業改善以外の目的には使用しない。

### 1.2 調査の方法

「令和4年度前期『授業改善のためのアンケート』実施要領」(図1)および「令和4年度後期『授業改善のためのアンケート』実施要領」(図2)にしたがい、表1の項目について調査を実施する。Q1からQ5は単項選択による回答形式とし、「1. 全くそう思わない」「2. そう思わない」「3. どちらともいえない」「4. そう思う」「5. とてもそう思う」の5件法で調査する。回答結果は、1～5点に得点化した後、集計を行う。Q6は自由記述による回答形式とする。

## 令和4年度前期「授業改善のためのアンケート」実施要領

### 1. 実施科目

以下の科目を除いた「令和4年度前期開講科目」とする。

なお、非常勤講師担当の科目は、担当教員へ協力依頼を行い、その同意のうえ実施するものとする。

※以下の科目は、実施しないものとする。

- (1) 研究指導、卒業論文（夜間主）
- (2) 教育実習に係る科目
- (3) 日本語科目
- (4) 社会連携実践Ⅰ～Ⅲ
- (5) アジア・オセアニア事情、ヨーロッパ事情、アメリカ事情
- (6) 履修者が10名以下の科目（基礎ゼミナールを除く）

※希望があれば教員の依頼に基づき実施する。

2. 実施期間 ●前期科目 令和4年7月25日(月)～8月9日(火)  
●夏季集中講義 令和4年8月17日(水)～9月20日(火)

3. 実施方法 学習支援システム manaba を使用すること。

#### 【注意事項】

※ 学生は 1科目につき1回（クラスのある科目については、1クラスにつき1回）、回答を行います。

※ 1科目を複数の教員で担当されている場合、manaba では「実施科目・担当教員一覧」のとおり担当教員を登録しております。

### 4. 集計・分析・結果の公表

①アンケートの集計は、学部教育開発専門部会で行う。

②集計結果は、学部教育開発部門で分析し報告書等で公表する。ただし、授業科目が特定されるような公表は行わない。

③集計したデータは、授業の改善以外の目的には使用しない。

④結果個票は、前期科目については9月上旬に、集中講義については令和3年2月頃に紙媒体で担当教員へ配付する。

### 5. 事務担当

グローバル戦略推進センター 教育支援部門事務

TEL : 0134-27-5240

E-Mail : k-shien@office.otaru-uc.ac.jp

図1 令和4年度前期「授業改善のためのアンケート」実施要領



## 令和4年度後期「授業改善のためのアンケート」実施要領

### 1. 実施科目

以下の科目を除いた「令和4年度後期開講科目」とする。

なお、非常勤講師担当の科目は、担当教員へ協力依頼を行い、その同意のうえ実施するものとする。

※以下の科目は、実施しないものとする。

- (1) 研究指導、卒業論文（夜間主）
- (2) 教育実習に係る科目
- (3) 日本語科目
- (4) 社会連携実践Ⅰ～Ⅲ
- (5) アジア・オセアニア事情、ヨーロッパ事情、アメリカ事情
- (6) 履修者が10名以下の科目（基礎ゼミナールを除く）

※希望があれば教員の依頼に基づき実施する。

### 2. 実施期間：令和5年1月16日（月）～2月8日（水）

### 3. 実施方法 学習支援システム manaba を使用すること。

#### 【注意事項】

※ 学生は 1科目につき1回（クラスのある科目については、1クラスにつき1回）、回答を行います。

※ 1科目を複数の教員で担当されている場合、manaba では「実施科目・担当教員一覧」のとおり担当教員を登録しております。

### 4. 集計・分析・結果の公表

- ①アンケートの集計は、教学 IR 室で行う。
- ②集計結果は、学部教育開発専門部会で分析し報告書等で公表する。ただし、授業科目が特定されるような公表は行わない。
- ③集計したデータは、授業改善のための手がかりを得るためにのみ使用する。
- ④結果個票は、夏季集中講義と併せて、令和5年3月中旬までに担当教員へ配付する。

### 5. 事務担当

グローバル戦略推進センター 教育支援部門

TEL : 0134-27-5240

E-Mail : k-shien@office.otaru-uc.ac.jp

図2 令和4年度後期「授業改善のためのアンケート」実施要領

表 1 授業改善のためのアンケート 質問項目

---

Q1 この科目のシラバス（方法・目的，達成目標，内容など）は適切であったと思いますか。

Q2 この科目を深く理解できたと思いますか。

Q3 授業に関する連絡，講義資料の提示・配布は適切であったと思いますか。

Q4 教員や他の学生とのやりとりは，あなたにとって十分なものであったと思いますか。

Q5 授業形式（対面，オンラインなどの受講形態）は，あなたにとって適切であったと思いますか。

Q6 この授業について，「良かった点」，「改善すべき点」があれば，具体的にお書きください。

---

## 2. 授業改善のためのアンケート調査結果

### 2.1 実施状況

本学では、授業改善のためのアンケート調査結果は科目ごとに集計されており、その結果は、授業を担当した各教員へフィードバックされている。ここでは、授業改善のためのアンケート調査結果に関して、本学全体の概要と動向を報告する。

令和4年度における対象科目数は472科目（前期270科目，後期202科目）であり，すべての対象科目において調査が実施された（表2）。

表2 授業改善アンケートの対象科目数

	前期	後期	通年	全体
対象科目数	270	202		472
非対象科目数	45	52	132	229

### 2.2 回収状況

調査が実施された科目について、開講期別の履修者数、回答者数、回収率を表3に示す。

全履修者数は32,028名（前年度33,147名），うち回答者数は8,062名（前年度9,964名），全体の回収率は25.2%（前年度30.1%）であった。開講期別の回収率は，前期25.1%（前年度31.3%），後期25.3%（前年度28.2%）となっている。前年度に比べて，前期の回収率は6.2ポイント低下，後期は2.9ポイント低下，全体では4.9ポイント低下している。

表3 授業改善アンケートの開講期別履修者数・回答者数・回収率

開講期	履修者数	回答者数	回収率
前期	18,413	4,616	25.1%
後期	13,615	3,446	25.3%
年間計	32,028	8,062	25.2%

### 2.3 評定値

授業改善アンケートの各質問項目に対する評定値（平均値，標準偏差）を表4へ示す。全体的に，前期より後期の方がやや平均値は低い傾向にある。全体の平均値は，いずれも4から4.3程度であり高い平均値を示している。しかし，Q2以外では平均値+標準偏差が5点を超えており，天井効果がみられた。多くの学生が高い評価をしている一方で，回答にはややばらつきもある。

表 4 授業改善アンケートの各質問項目に対する平均値および標準偏差

質問項目	前期		後期		全体	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Q1 シラバスの適切さ	4.30	0.80	4.23	0.82	4.27	0.81
Q2 科目の理解	4.04	0.94	3.96	0.95	4.00	0.95
Q3 連絡, 資料提示・配布	4.21	0.95	4.18	0.93	4.20	0.94
Q4 教員や学生とのやりとり	4.04	1.03	3.99	0.99	4.02	1.01
Q5 授業形式の適切さ	4.33	0.92	4.24	0.93	4.29	0.93

## 2.4 自由記述

質問項目の「Q6.この授業について、「良かった点」、「改善すべき点」があれば、具体的にお書きください。」は、自由記述で回答を求めた。アンケートに回答した 8,062 名のうち、2,130 件 (26.4%) の自由記述を得た。自由記述のうち、「特になし」「問題なし」などの回答を除くと、2,056 件 (25.5%) であった。

自由記述の回答結果について、KH Coder<sup>1</sup>を用いて分析を実施した。前処理として KH Coder に組み込まれている TermExtract<sup>2</sup>を用いて複合語を検出し、その後、共起ネットワーク分析を行った。自由記述の回答結果について、出現単語の頻度 (上位 150 個) を表 5、共起ネットワークを図 3 へ示す。

出現頻度の高い上位 5 個の抽出語について、関連度の高い順に列記した単語が表 6 である。出現頻度が最も高い単語である「授業」に関連するものとして、[対面/内容/オンライン/動画/楽しい]があった。オンラインではなく対面授業への希望、対面授業に対する楽しさ、といった対面授業に対して好意的な意見が多数あった。「講義」についても「授業」とほぼ同様な意見がみられた。「思う」、「良い」、「感じる」は相互に関連しており、授業や講義に対して肯定的な意見がある一方で、「難しい」という記載も多くみられた。

表 7 は、肯定的意見と否定的意見に関して特徴的な単語を抜粋し、各単語との関連度を列記した表である。「楽しい」、「面白い」に関連するものとして、[授業/講義/学ぶ/英語]などがあつた。特に、英語や語学について楽しい、面白いといった感想が多かった。「もう少し」、「難しい」に関連するものとして、[早い/説明/テスト/詳しい/長い/課題]などがあつた。課題や小テストについてももう少し詳しい説明が欲しい、課題や小テストの連絡や告知をもう少し早くして欲しい、テストの時間を長くって欲しい、内容・テスト・課題が難しい、といった課題や小テストに関する要望が多くみられた。

<sup>1</sup> 樋口耕一 (2020) 社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版. ナカニシヤ出版

<sup>2</sup> <http://gensen.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>

表5 Q6「良かった点, 改善すべき点」の出現単語 (上位 150 個)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	1009	提出	74	難易度	34
思う	600	非常	74	興味深い	33
良い	374	行う	73	最後	33
講義	352	書く	72	長い	33
感じる	297	他	69	様々	33
先生	262	使う	67	期末テスト	32
内容	233	大変	65	今	32
多い	223	連絡	65	触れる	32
時間	215	知る	63	短い	32
理解	205	考える	62	毎週	32
課題	197	教える	61	履修	31
対面	190	manaba	58	高い	30
ありがとう	178	公開	56	最初	30
楽しい	170	グループワーク	55	大学	30
小テスト	167	復習	55	ディスカッション	29
自分	165	話す	55	教室	29
レポート	153	スライド	54	持つ	29
動画	152	部分	54	成績	29
英語	139	取る	53	内	29
分かる	137	参加	52	プリント	28
人	135	評価	52	回	28
テスト	134	出す	51	教員	28
学生	127	配布	50	形態	28
オンライン	125	回答	48	進める	28
説明	122	発表	48	練習	28
問題	121	学べる	46	経済学	27
もう少し	120	話	46	思える	27
見る	116	レスポンス	45	進む	27
特に	116	出席	45	遅い	27
学ぶ	111	言う	44	方法	27
受ける	110	学習	43	意見	26
難しい	109	教科書	42	意味	26
生徒	108	対応	41	音声	26
勉強	107	知識	41	嬉しい	26
改善	106	読む	41	期間	26
資料	102	コミュニケーション	40	実施	26
質問	99	交流	40	無い	26
毎回	97	早い	40	講義内容	25
面白い	96	個人	39	講師	25
オンデマンド	94	集中	39	試験	25
受講	91	確認	38	終わる	25
聞く	90	たくさん	37	深める	25
丁寧	88	後半	37	全体	25
機会	83	必要	37	アンケート	24
出来る	81	興味	36	メール	24
ZOOM	80	実際	36	期末試験	24
解説	79	取り組む	36	少ない	24
少し	79	前	36	深まる	24
レジュメ	76	出る	35	多く	24
形式	75	助かる	34	途中	24

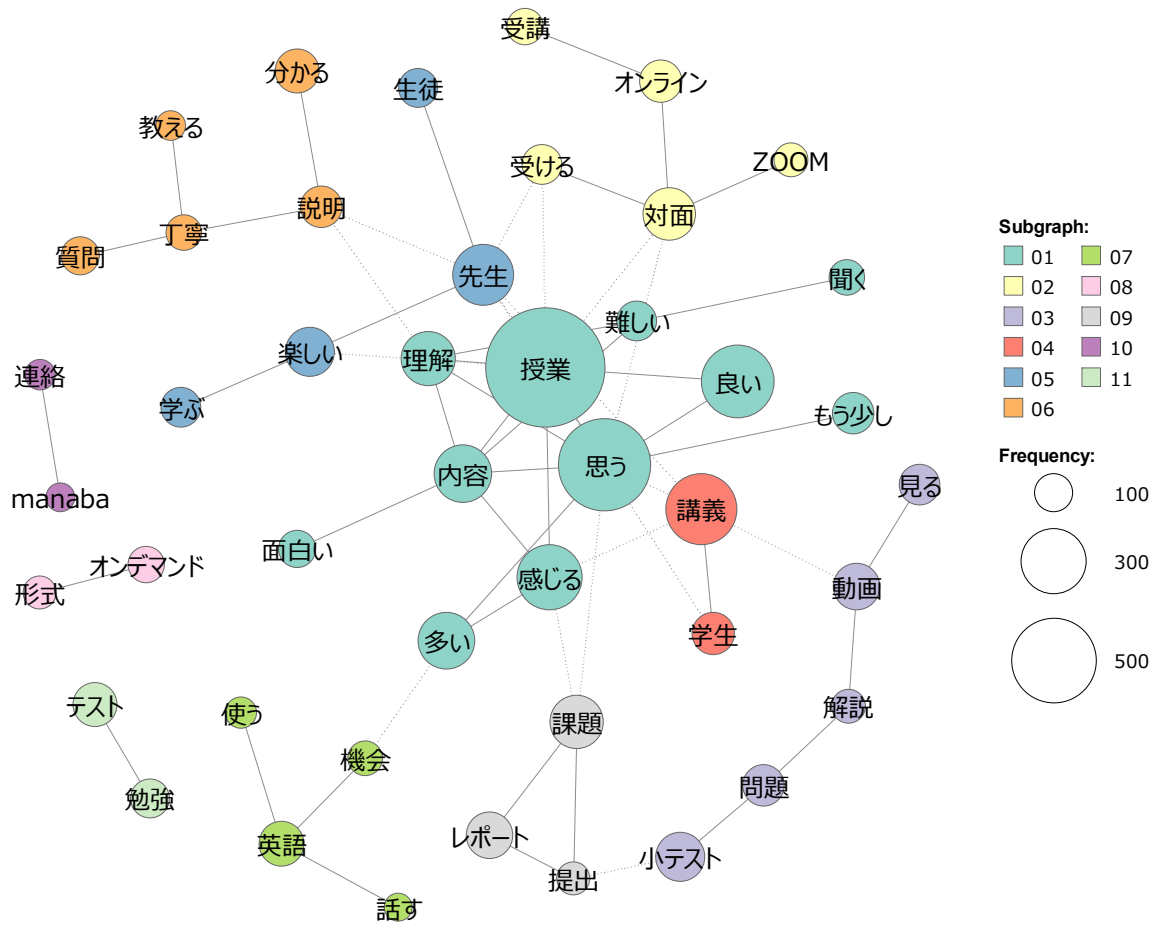


図3 Q6「良かった点、改善すべき点」の共起ネットワーク

表 6 出現回数上位との関連語句

関連度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
授業	対面	内容	オンライン	動画	楽しい	受ける	先生	オンデマンド	良い	形態
思う	良い	授業	深まる	難しい	多い	改善	講義	先生	理解	内容
良い	思う	授業	講義	感じる	非常	レポート	経験	勉強	本当に	オンデマンド
講義	動画	時間	楽しい	オンライン	良い	面白い	受ける	先生	オンデマンド	自体
感じる	多い	難しい	良い	授業	少し	短い	講義	長い	内容	必要

表 7 代表的な抽出語との関連語句

関連度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
楽しい	授業	学ぶ	講義	学べる	英語	受ける	学習	受講	出来る	毎回
面白い	授業	内容	講義	動画	一番	大変	ありがとう	感じる	非常	思う
もう少し	早い	授業	説明	余裕	時間	課題	詳しい	長い	問題	欲しい
難しい	内容	感じる	少し	思う	テスト	理解	課題	印象	授業	小テスト

### 3. まとめ

令和 4 年度「授業改善のためのアンケート」結果から、次のようなことが明らかとなった。

- ・授業改善アンケートは、全ての対象科目について実施され、全体の回答者は 8,062 名であった。回収率は、前年度の 30.1%から 4.9 ポイント低下し、25.2%であった。前期、後期とも前年度に比べて回収率は 3%から 6%程度、低下している。
- ・授業改善アンケートの各質問項目に対する平均値は 4 から 4.3 程度であり、回答した学生は概ね問題なく履修しているといえる。
- ・自由記述については、アンケートに回答した 8,062 名のうち、2,130 件 (26.4%) から回答があった。

第2章 大学院商学研究科(現代商学専攻)  
令和4年度 大学院FDアンケート集計結果報告



# 令和4年度大学院FDアンケート 博士前期課程学生対象 集計結果報告

## 1. 令和4年度 大学院生対象調査の概要

大学院現代商学専攻博士前期・後期課程の教育課程（カリキュラム）及び教育支援体制に関して幅広く学生から意見等を聴取し、今後の大学院指導に資することを目的として実施する。

## 2. 対象者

現代商学専攻博士前期・後期課程に在籍する学生

## 3. 実施時期

令和4年11月30日（水）～12月16日（金）

## 4. 実施方法

対象者に、WEBアンケートシステムからメールで依頼し、回答してもらう。

## 5. 集計結果

アンケートの集計・分析は、大学院教育開発専門部会で行い公表する。本アンケート調査は、数量調査（5件法）と自由記述から構成されている。数量調査に関しては、数値が大きいほど高評価を示している。

## 6. 回答状況

対象者数は11名のうち7名から回答が得られ、回収率は63.6%であった。

## 7. 集計結果

### 7.1. あなた自身にとって興味深い科目が開講されている

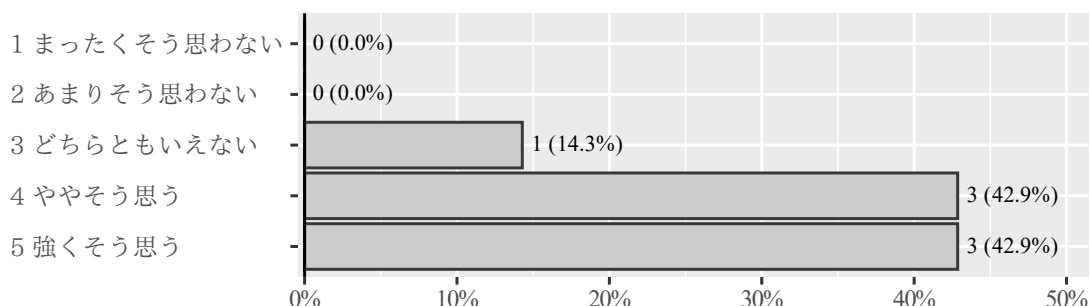


図7-1: 「あなた自身にとって興味深い科目が開講されている」の回答

## 7.2. 幅広い内容にわたって科目を選択することができる

---

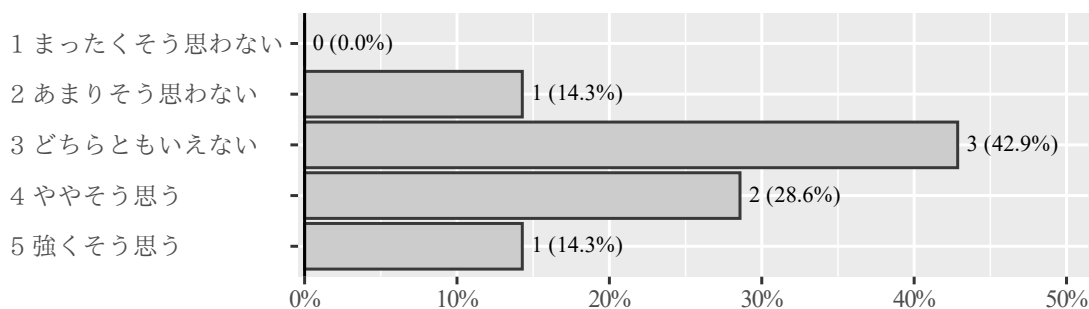


図7-2: 「幅広い内容にわたって科目を選択することができる」の回答

## 7.3. 履修科目を決定する際シラバスが参考になった

---

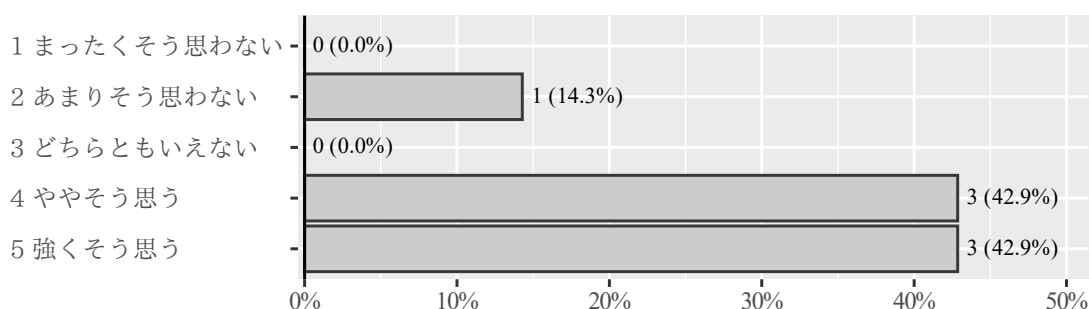


図7-3: 「履修科目を決定する際シラバスが参考になった」の回答

## 7.4. 大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた

---

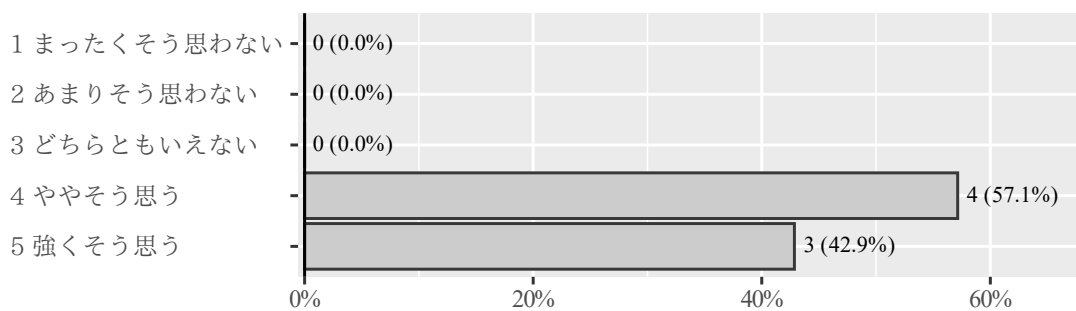


図7-4: 「大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた」の回答

## 7.5. 修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である

---

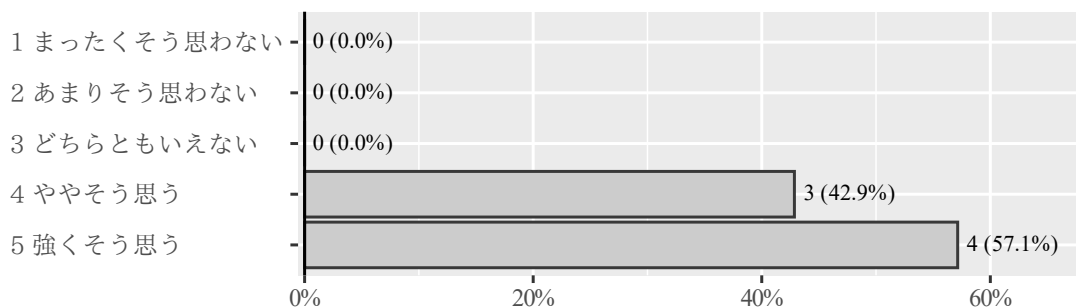


図7-5: 「修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である」の回答

## 7.6. 各項目の平均値

「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階の選択肢に対して5点から1点を与え、その平均値を集計示す。

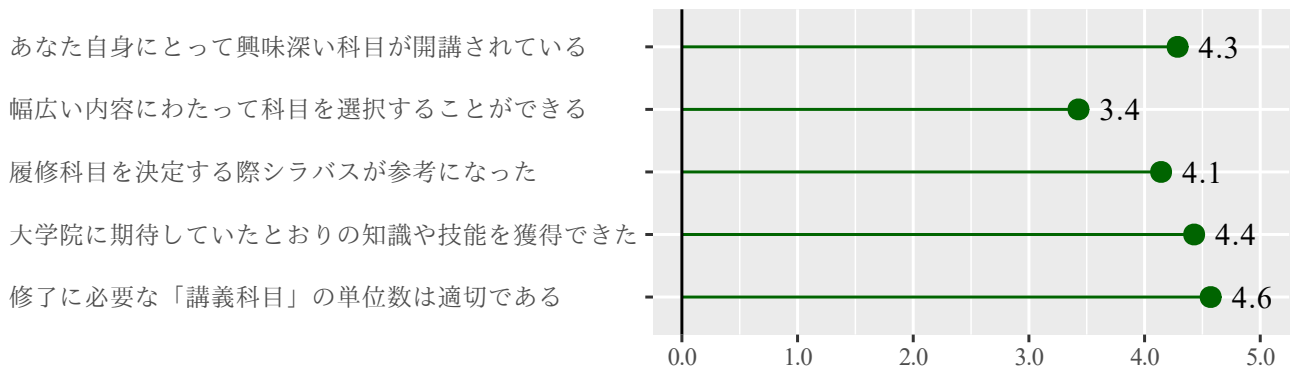


図7-6: 各設問の平均値

## 7.7. 指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている

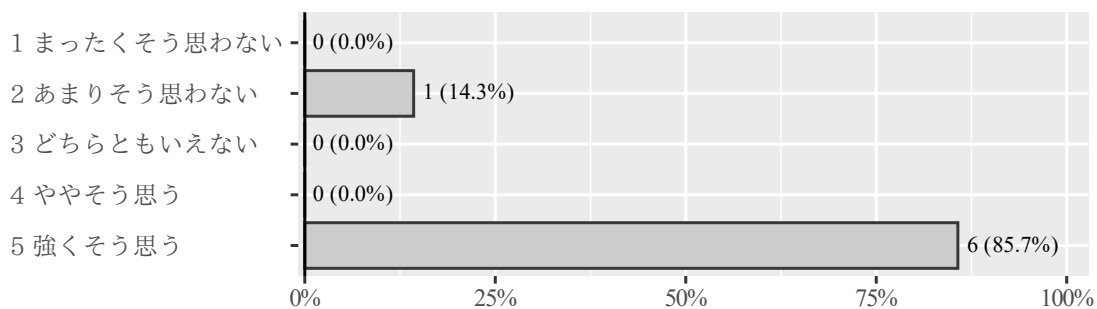


図7-7: 「指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている」の回答

## 7.8. 研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている

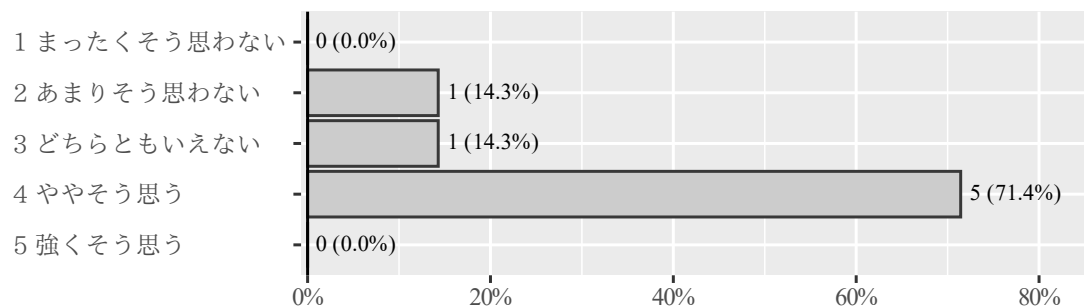


図7-8: 「研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている」の回答

### 7.9. 研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている

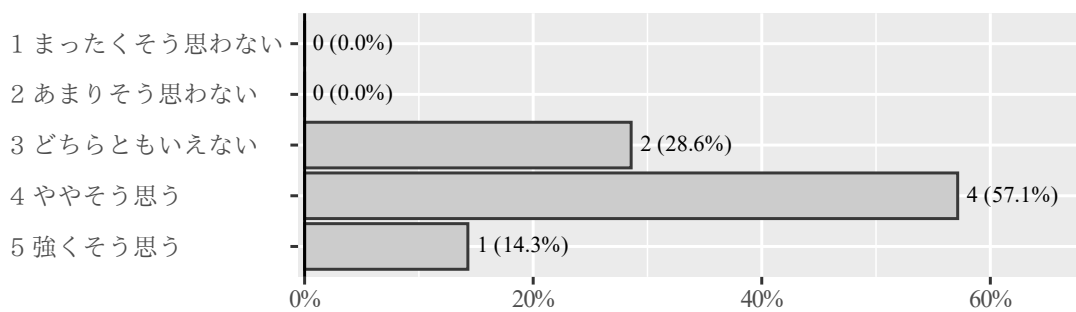


図7-9: 「研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている」の回答

### 7.10. 大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である

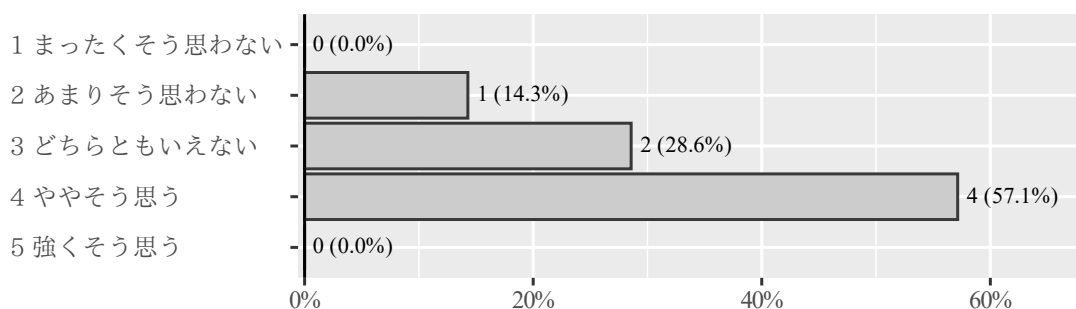


図7-10: 「大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である」の回答

### 7.11. 学内設備（PC など）の利用環境が整っている

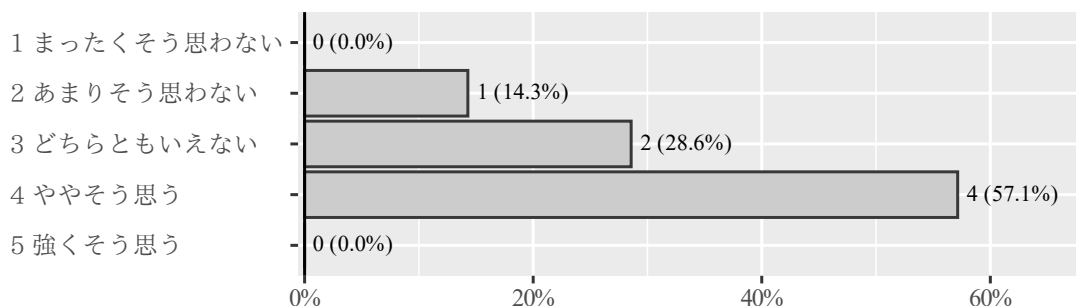


図7-11: 「学内設備（PC など）の利用環境が整っている」の回答

### 7.12. 各項目の平均値

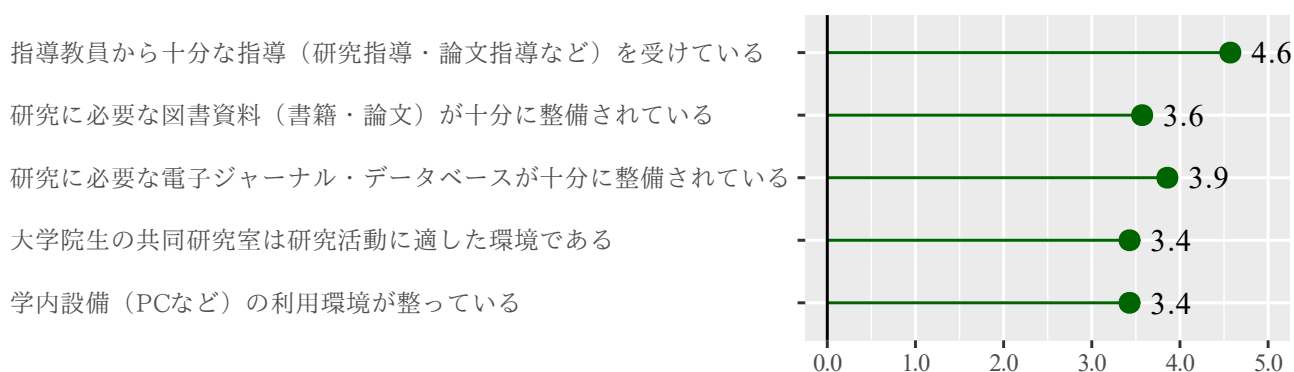


図7-12: 各設問の平均値

### 7.13. 進路や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある

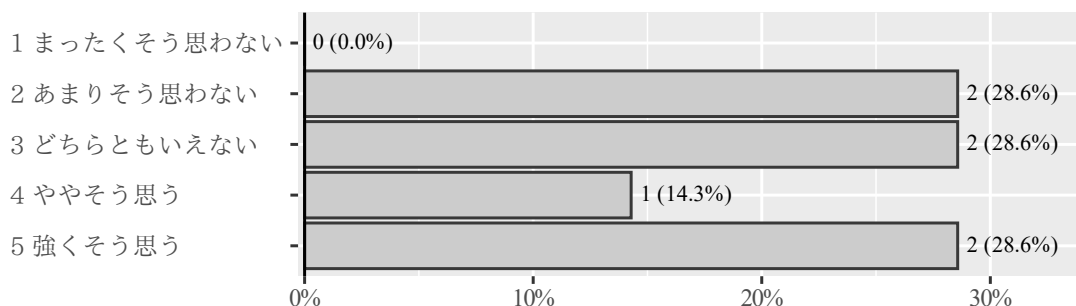


図7-13: 「進路（就職活動を含む）や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある」の回答

### 7.14. 現在の大学院における学習活動に満足している

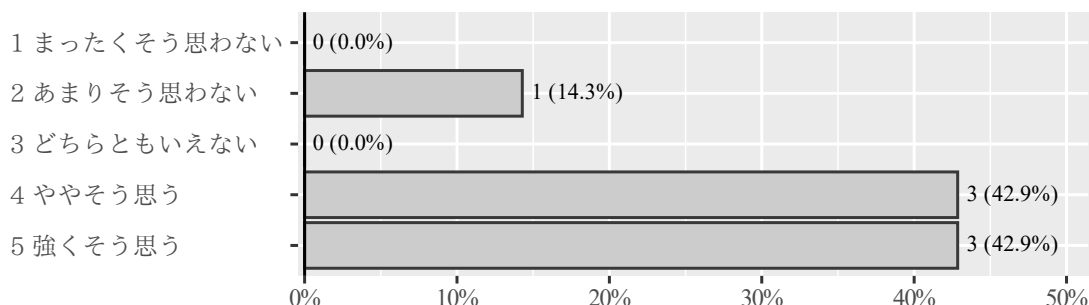


図7-14: 「現在の大学院における学習活動に満足している」の回答

### 7.15. 各項目の平均値

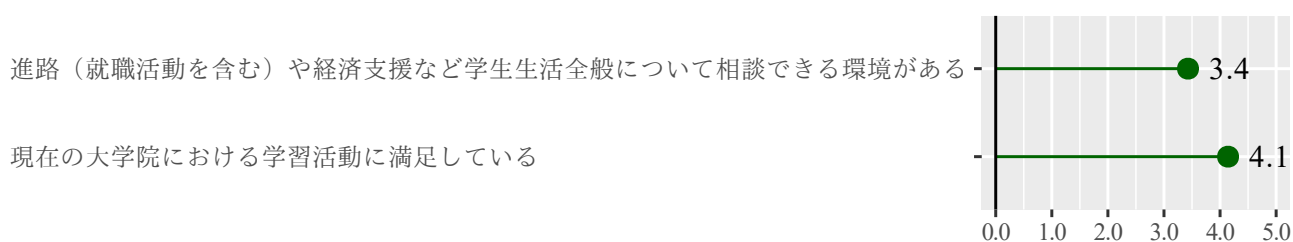


図7-15: 各設問の平均値

### 7.16. 学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある

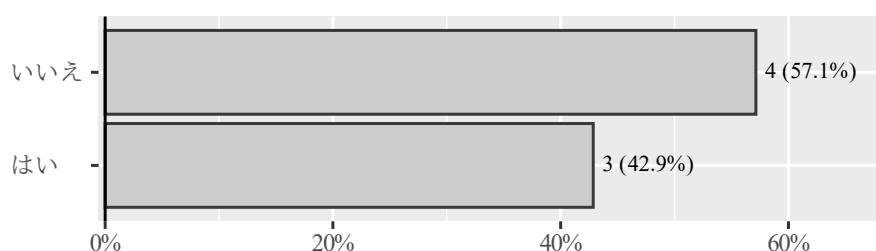


図7-16: 「学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある」の回答

# 令和4年度大学院FDアンケート 博士後期課程学生対象 集計結果報告

## 1. 令和4年度 大学院生対象調査の概要

大学院現代商学専攻博士前期・後期課程の教育課程（カリキュラム）及び教育支援体制に関して幅広く学生から意見等を聴取し、今後の大学院指導に資することを目的として実施する。

## 2. 対象者

現代商学専攻博士前期・後期課程に在籍する学生

## 3. 実施時期

令和4年11月30日（水）～12月16日（金）

## 4. 実施方法

対象者に、WEBアンケートシステムからメールで依頼し、回答してもらう。

## 5. 集計結果

アンケートの集計・分析は、大学院教育開発専門部会で行い公表する。本アンケート調査は、数量調査（5件法）と自由記述から構成されている。数量調査に関しては、数値が大きいほど高評価を示している。

## 6. 回答状況

対象者数は10名のうち6名から回答が得られ、回収率は60.0%であった。

## 7. 集計結果

### 7.1. あなた自身にとって興味深い科目が開講されている

---

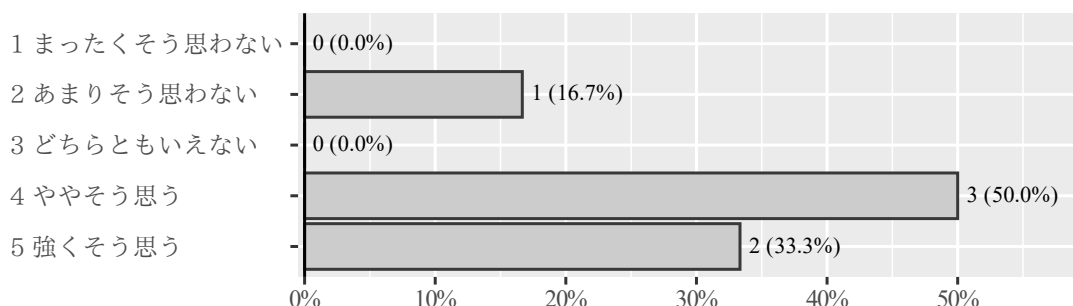


図7-1: 「あなた自身にとって興味深い科目が開講されている」の回答

## 7.2. 幅広い内容にわたって科目を選択することができる

---

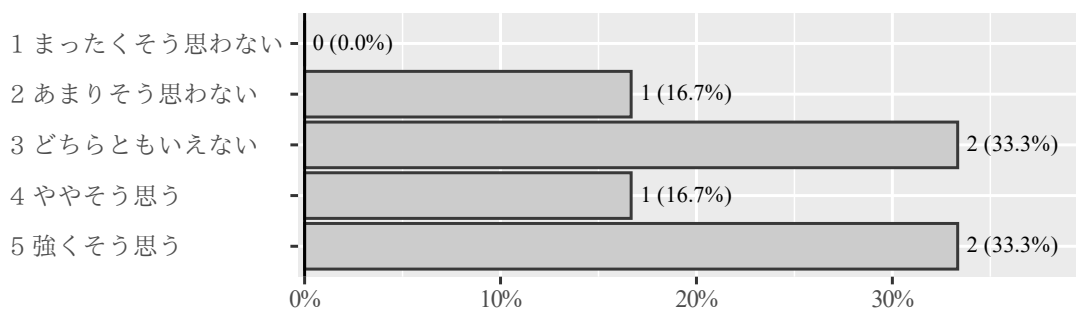


図7-2: 「幅広い内容にわたって科目を選択することができる」の回答

## 7.3. 履修科目を決定する際シラバスが参考になった

---

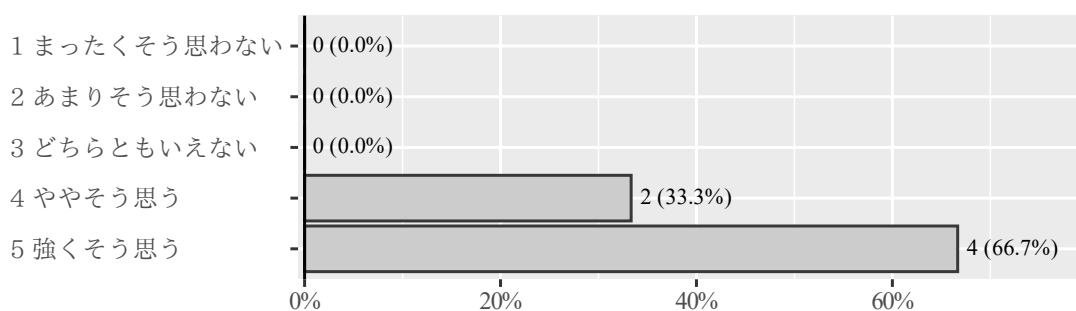


図7-3: 「履修科目を決定する際シラバスが参考になった」の回答

## 7.4. 大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた

---

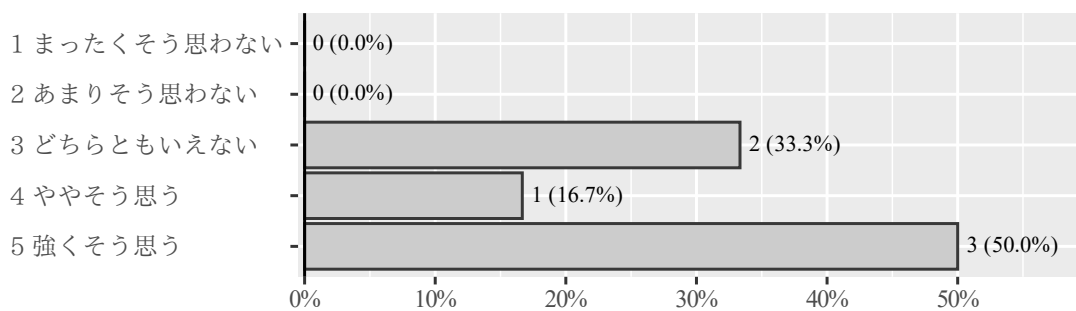


図7-4: 「大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた」の回答

## 7.5. 修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である

---

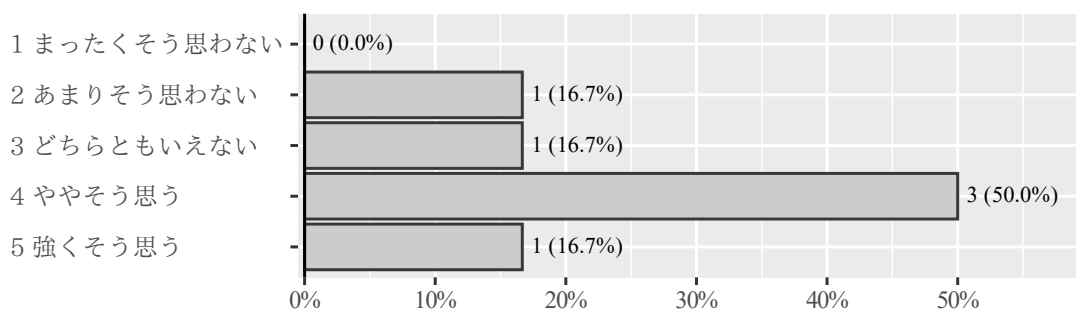


図7-5: 「修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である」の回答

## 7.6. 各項目の平均値

「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階の選択肢に対して5点から1点を与え、その平均値を集計示す。

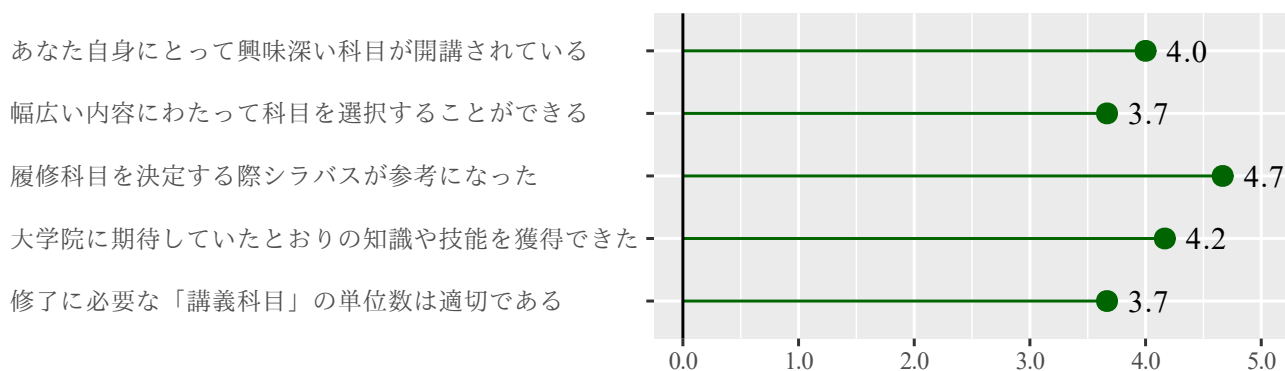


図7-6: 各設問の平均値

## 7.7. 指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている

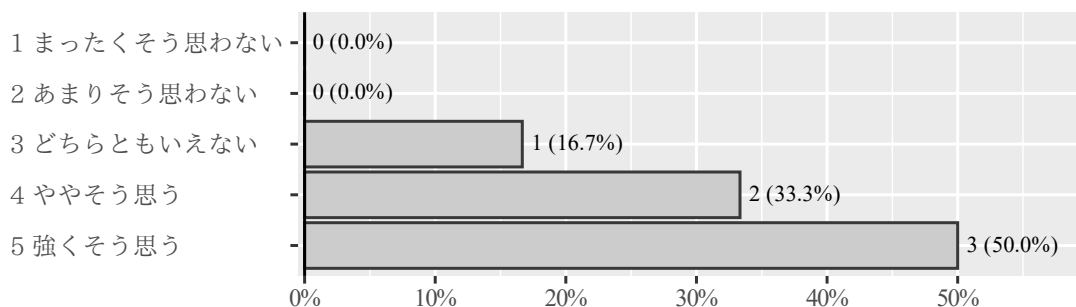


図7-7: 「指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている」の回答

## 7.8. 研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている

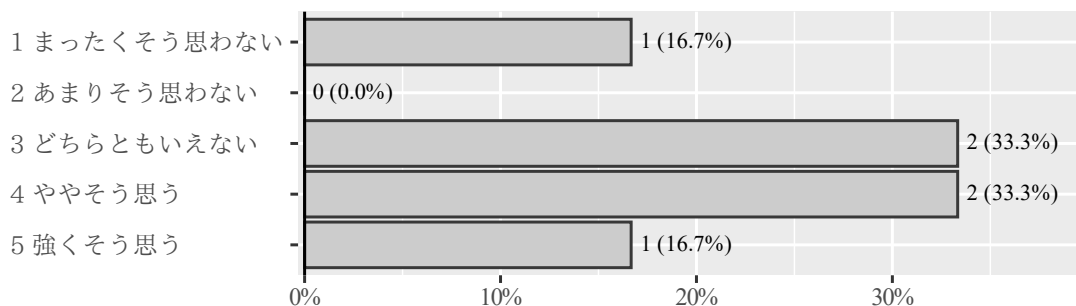


図7-8: 「研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている」の回答



### 7.9. 研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている

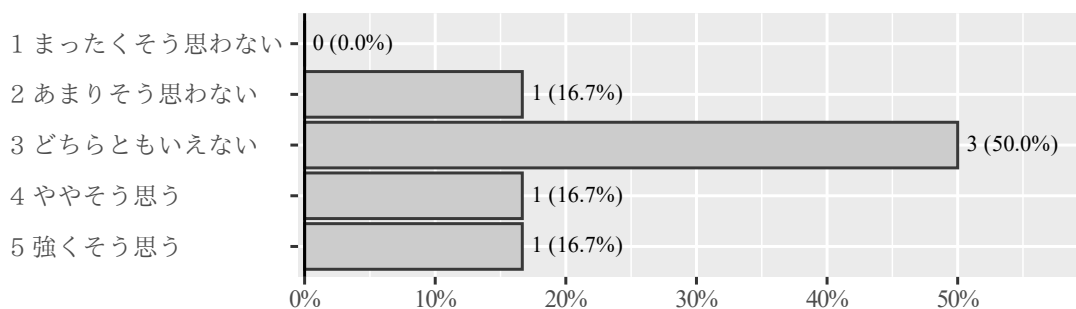


図7-9: 「研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている」の回答

### 7.10. 大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である

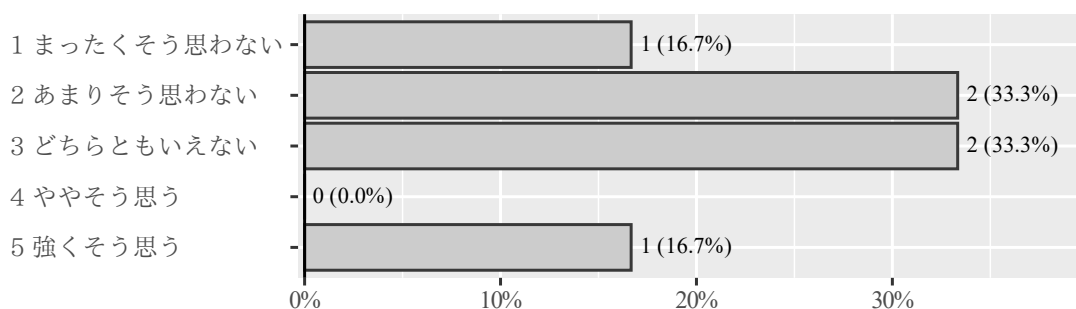


図7-10: 「大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である」の回答

### 7.11. 学内設備（PC など）の利用環境が整っている

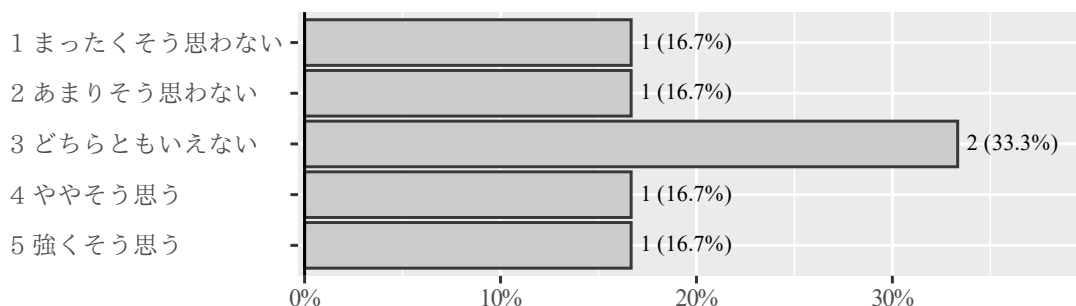


図7-11: 「学内設備（PC など）の利用環境が整っている」の回答

### 7.12. 各項目の平均値

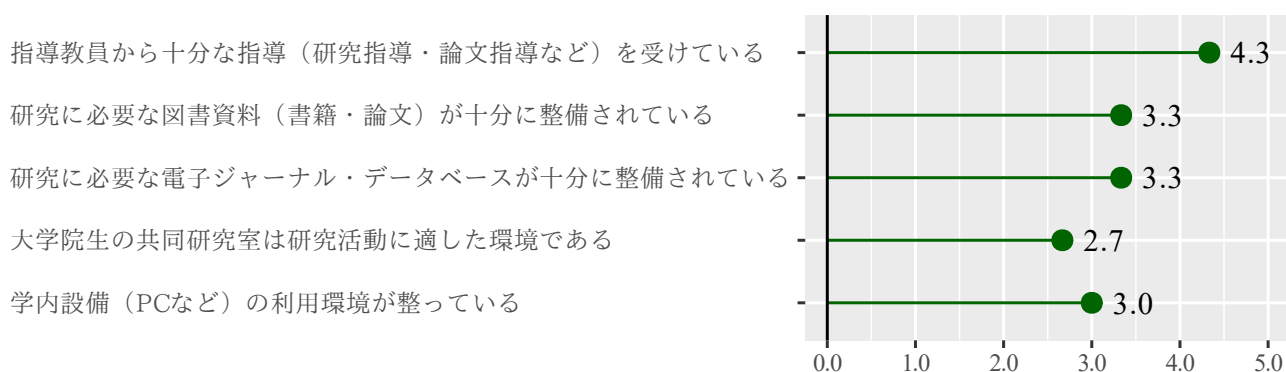


図7-12: 各設問の平均値

### 7.13. 進路や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある

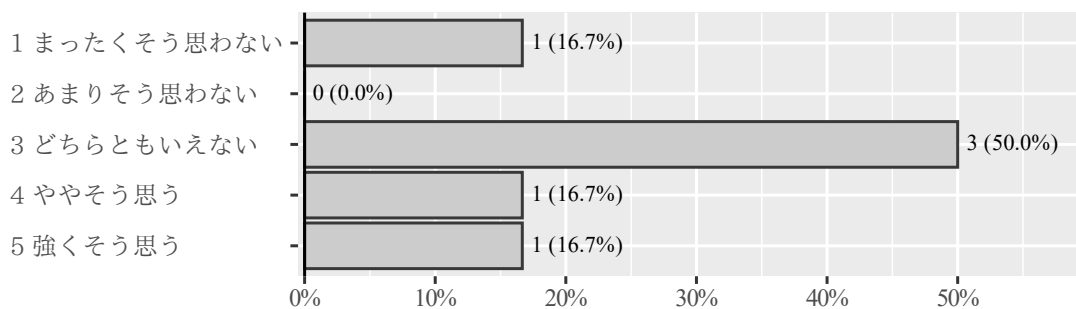


図7-13: 「進路（就職活動を含む）や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある」の回答

### 7.14. 現在の大学院における学習活動に満足している

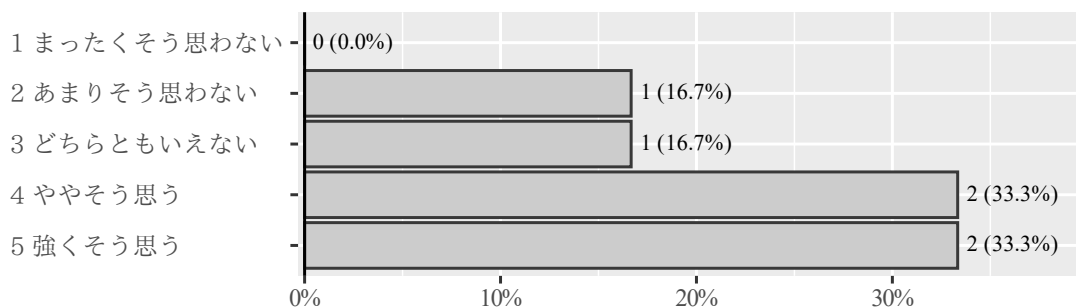


図7-14: 「現在の大学院における学習活動に満足している」の回答

### 7.15. 各項目の平均値

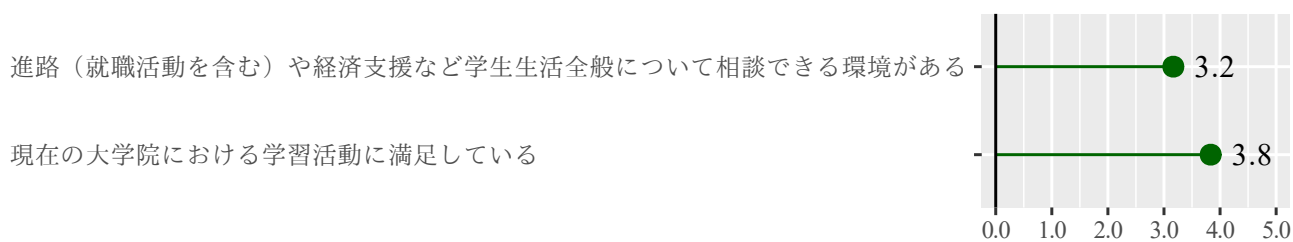


図7-15: 各設問の平均値

### 7.16. 学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある

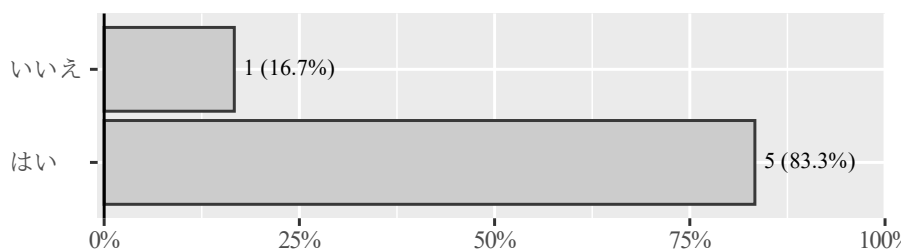


図7-16: 「学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある」の回答

第3章 大学院商学研究科  
(アントレプレナーシップ専攻)

令和4年度 「授業評価アンケート」集計結果と分析

## 1. はじめに

本報告書は、令和4年度に開講した全44科目（「ビジネス倫理（基本）・ビジネス倫理（基礎）」、「アントレプレナーシップI（基本）・ベンチャー経営（基礎）」はコードシェア科目のため実質42科目）の「授業改善アンケート」の集計結果とその分析結果、ならびに「成績評価」の集計結果とその分析結果を取りまとめたものである（「特殊講義I（ノースウェスタン大学集中講義）」については、コロナ禍により非開講）。

「授業改善アンケート」は、授業参観による「同僚評価」と教員自身による「自己評価」をもとに、授業の改善に結びつくヒントを探ろうとするものであり、これらを活用することで、より品質の高い教育の提供を図るものである。これに対して、「成績評価」は本専攻の在学生ならびに修了生による学習活動の成果を確認し、より一層の能力向上を図ろうとするものである。さらに、令和3年度から、教学IR室に協力を依頼し、本報告書の集計をより分かりやすい表記にすべく、助力を得ている。

なお、以下では「授業改善アンケート」のことを指して「アンケート」と表記している。

## 2. アンケートの概要

### 2.1. 質問項目

アンケートは20項目からなり、それぞれの質問項目は以下のとおりである。なお、質問項目1、2、4は五点尺度の回答と併せて自由記述による回答を、質問項目18、19、20は自由記述による回答を求めている。

1. カリキュラム
  - ・本科目は、下記の【カリキュラム・ポリシー】と照らして、十分に整合していますか。
2. 学力/資質/能力
  - ・本科目の授業内容は、本専攻が目指している【学生に身につけさせたい学力・資質・能力や養成する人材像】と照らして、十分に整合していますか。
3. シラバス整合性
  - ・本科目の授業内容は、シラバスに記載された授業の目的と照らして、十分に整合していますか。
4. 理解促進
  - ・本科目では、ケース・メソッドの導入や各種エクササイズの実施、対話・討論型の授業運営、多彩なメディアや情報機器の活用など、履修生の理解を促しスキルの習得に資する工夫がみられましたか。
5. 説明
  - ・授業における教員の説明（話し方の明瞭さやパワーポイントの見やすさを含む）は、分かりやすかったですか。
6. 資料
  - ・授業で用いられた題材や資料は、授業を理解する上で適切なものでしたか。
7. グループワーク
  - ・授業で行われたグループワークやグループディスカッションについて、そこから得るものがありましたか。
8. ディスカッション
  - ・プレゼンテーションや全体ディスカッション（質疑応答を含む）について、そこから得るものがありましたか。
9. 時間外学習

- 本科目では、授業時間以外の学習（例えば、事前・事後の課題、予習、復習等）について、その必要性がどのくらいあると思いますか。
10. シラバス時間外/学修管理システム時間外
    - 本科目における事前・事後の課題や教室外での学習等について、シラバスではその内容が適切に記述されていましたか。また、学修管理システム等で適宜、適切に周知されていたか。（シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ）
  11. 事前課題
    - 事前課題は、授業を理解する上で役に立ちましたか。
  12. 事後課題
    - 事後課題ないしレポートの作成から得るものがありましたか。
  13. コメント
    - 課題・レポート返却のタイミングや、コメントは適切なものでしたか。
  14. 時間外対応
    - 授業時間外での対応について、相対による教員の対応や学修管理システムを活用した対応は適切でしたか。
  15. シラバス内容/学修管理システム内容
    - シラバス等において、モジュールごとの授業内容の記述は適切でしたか。（シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ）
  16. シラバス成績/学修管理システム成績
    - シラバスに記載された成績評価の方法・基準について、その内容は適切に記述されていたか。また、学修管理システム等で適宜、適切に周知されていたか。（シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ）
  17. 満足度
    - 本科目の授業について、満足しましたか。
  18. 評価点
    - 本科目の授業について、良かった点をお知らせください。（5つまで）
  19. 改善点
    - 本科目の授業について、こうすれば良かったという点をお知らせください。（5つまで）
  20. 自由記述
    - その他お気づきの点がございましたらご記入ください。

なお、アンケートは各質問項目については5段階評価を行っており、評価対象の授業において該当しない質問項目については分岐させている。

## 2.2. 対象科目と調査の全体的概要

アンケートは、令和4年度に開講した全44科目で実施し、各科目の回答者数は以下のとおりである。令和4年度のアンケート回収率は95.7%であり、昨年度の92.7%より上昇した。これは、アンケート回答の時間を、可能な限り授業時間中に設けるようにしたこと、回答方法を令和3年度前期よりWebシステムへ移行したこと、未回答者への督促などによる効果とみられる。本アンケート調査は、FD基礎資料としてのみならず、認証評価においても重要なデータとなっており、回収率維持・向上のために引き続き注力していきたい。

## 2.3. 基本科目

科目	主担当教員	対象者数	回答者数	回答率
経営戦略Ⅰ	玉井健一	35	35	100.0%
マーケティングⅠ	近藤公彦	35	34	97.1%
経営組織Ⅰ	西村友幸	35	34	97.1%
アカウントティングⅠ	籾本智之	36	35	97.2%
ファイナンスⅠ	手島直樹	36	32	88.9%
ビジネス倫理	南健悟	4	4	100.0%
アントレプレナーシップⅠ	泉貴嗣	33	33	100.0%

## 2.4. 基礎科目

科目	主担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスシミュレーション	籾本智之	23	17	73.9%
ビジネスシミュレーションBクラス	籾本智之	6	6	100.0%
経営戦略Ⅱ	玉井健一	25	23	92.0%
マーケティングⅡ	猪口純路	20	19	95.0%
経営組織Ⅱ	林亜衣子	23	21	91.3%
経営組織Ⅲ	西村友幸	14	14	100.0%
アカウントティングⅡ	堺昌彦	20	20	100.0%
アカウントティングⅢ	乙政佐吉	20	20	100.0%
ファイナンスⅡ	手島直樹	11	10	90.9%
ビジネス法務Ⅰ	玉井健一	12	11	91.7%
経済学・分析手法Ⅰ	吉地望	14	13	92.9%
経済学・分析手法Ⅱ	谷祐児	11	10	90.9%
経済学・分析手法Ⅲ	宮崎義久	10	10	100.0%
ベンチャー経営Ⅰ	泉貴嗣	1	1	100.0%
地域経済・経営Ⅰ	宇田川耕一	11	11	100.0%
地域経済・経営Ⅱ	千葉俊輔	15	13	86.7%
地域経済・経営Ⅲ	小高咲	4	4	100.0%
ビジネス英語Ⅰ	浦島久	11	9	81.8%
ビジネス倫理	南健悟	13	13	100.0%

## 2.5. 発展科目

科目	主担当教員	対象者数	回答者数	回答率
統合科目 I	内田純一	24	24	100.0%
統合科目 II	鈴木真人	4	4	100.0%
統合科目 III	李濟民	9	9	100.0%
統合科目 IV	太田稔	19	18	94.7%
アカウンティング IV	松本康一郎	4	4	100.0%
ファイナンス III	齋藤一朗	5	5	100.0%
ビジネス法務 II	小寺正史	7	7	100.0%
ベンチャー経営 III	坂本英樹	16	15	93.8%
ビジネス英語 II	小林敏彦	3	3	100.0%
ビジネス英語 III	小林敏彦	7	6	85.7%
特殊講義 II	藤原健祐	4	4	100.0%
特殊講義 III	籾本智之	1	1	100.0%
特別講義	五味宏	28	27	96.4%

## 2.6. 実践科目

科目	主担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスプランニング I	内田純一	36	36	100.0%
ケーススタディ I	堺昌彦	38	36	94.7%
ビジネスプランニング II	藤原健祐	28	28	100.0%
ケーススタディ II	堺昌彦	26	26	100.0%

## 2.7. ビジネスワークショップ

科目	主担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスワークショップ	籾本智之	26	25	96.2%
リサーチペーパー	籾本智之	26	25	96.2%

## 2.8. 全体の回答率

対象者数	回答者数	回答率
789	755	95.7%

## 3. アンケートの分析

### 3.1. 全体の回答分布

各質問項目に対する5段階評価の分布と、各質問項目の評価数、平均評価値については以下のとおりである。図では、各項目の回答割合を100%の帯グラフで示し、最もポジティブな「選択肢5」の割合が原点より右に示すようにオフセットしている。

※ リカレント受講生の受講についても、対象者数に含めている。

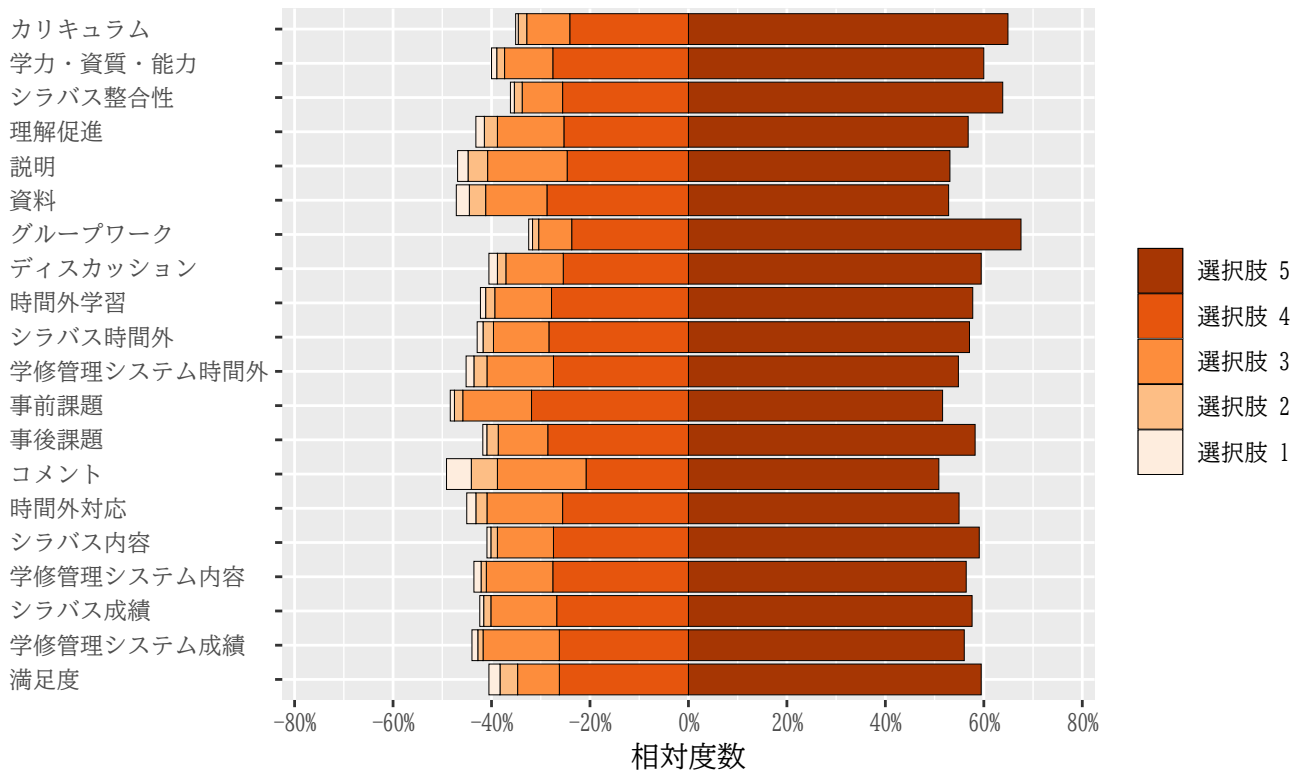


図3-1: 各項目の回答割合



	選択肢 1		選択肢 2		選択肢 3		選択肢 4		選択肢 5	
カリキュラム	4	(0.5%)	13	(1.7%)	66	(8.7%)	182	(24.1%)	490	(64.9%)
学力・資質・能力	8	(1.1%)	12	(1.6%)	74	(9.8%)	208	(27.5%)	453	(60.0%)
シラバス整合性	6	(0.8%)	12	(1.6%)	62	(8.2%)	193	(25.6%)	482	(63.8%)
理解促進	13	(1.7%)	20	(2.6%)	102	(13.5%)	191	(25.3%)	429	(56.8%)
説明	16	(2.1%)	30	(4.0%)	122	(16.2%)	186	(24.6%)	401	(53.1%)
資料	20	(2.6%)	25	(3.3%)	94	(12.5%)	217	(28.7%)	399	(52.8%)
グループワーク	5	(0.8%)	8	(1.2%)	43	(6.7%)	152	(23.7%)	433	(67.6%)
ディスカッション	13	(1.7%)	13	(1.7%)	88	(11.7%)	192	(25.4%)	449	(59.5%)
時間外学習	8	(1.1%)	14	(1.9%)	87	(11.5%)	210	(27.8%)	436	(57.7%)
シラバス時間外	9	(1.2%)	16	(2.1%)	85	(11.3%)	214	(28.3%)	431	(57.1%)
学修管理システム時間外	12	(1.6%)	20	(2.6%)	102	(13.5%)	207	(27.4%)	414	(54.8%)
事前課題	6	(0.8%)	12	(1.7%)	99	(14.0%)	226	(31.9%)	366	(51.6%)
事後課題	6	(0.8%)	17	(2.3%)	74	(10.1%)	210	(28.6%)	428	(58.2%)
コメント	38	(5.0%)	40	(5.3%)	136	(18.0%)	157	(20.8%)	384	(50.9%)
時間外対応	14	(1.9%)	17	(2.3%)	116	(15.4%)	193	(25.6%)	415	(55.0%)
シラバス内容	6	(0.8%)	10	(1.3%)	86	(11.4%)	207	(27.4%)	446	(59.1%)
学修管理システム内容	11	(1.5%)	8	(1.1%)	102	(13.5%)	208	(27.5%)	426	(56.4%)
シラバス成績	6	(0.8%)	11	(1.5%)	101	(13.4%)	202	(26.8%)	435	(57.6%)
学修管理システム成績	9	(1.2%)	8	(1.1%)	117	(15.5%)	198	(26.2%)	423	(56.0%)
満足度	17	(2.3%)	27	(3.6%)	64	(8.5%)	198	(26.2%)	449	(59.5%)

5段階評価の結果をみると、ポジティブな選択肢4と5がほとんどで、全ての項目において選択肢5の比率が5割超となっている。しかしながら、前年度はコメント以外の項目において選択肢5が6割超であり、全ての項目で選択肢5の比率が前年度を下回っていることには注意を要する。ネガティブな選択肢1や2についても極めて少ない水準を保ってはいるが、説明・資料・コメントの項目で顕著に増加していることは留意すべきであろう。特にコメントに対してネガティブな評価の比率が1割を超えている点には注意を要する。

図3-2は、2004年度から今年度までの満足度の推移を示したものであり、満足度は中期的に高水準を保っている。アンケートによって測定されている項目については、概ね高い評価を得られており、授業設計・運営の質を一層高めていくためには、評価項目の見直しが重要であると思われる。他方で、上述のように今年度においては広範な項目において評価の低下の兆候がみられ、全体としての満足度も高い水準を保ってはいるものの近年は低下の傾向が見られることから、この点については議論を行うべきであると考えられる。

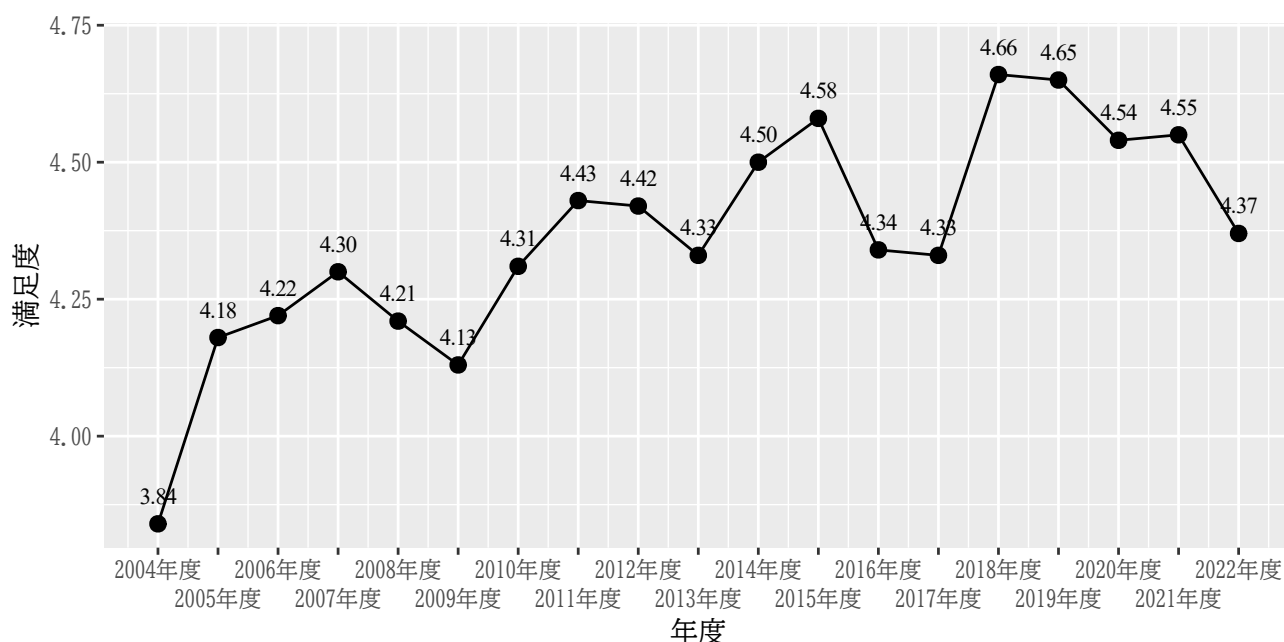


図3-2: 満足度の推移

### 3.2. 「教員の教授法について」の分析

各質問項目間の相関係数については、表3-1に示したとおりである。これらの中から、満足度との相関関係および各質問項目の平均点を抽出したものが表3-2、それに基づき散布図を描いたものが図3-3影響度-パフォーマンス・マトリクスである。

パフォーマンス・マトリクスにおいて、相対的に満足度との相関が高くかつ評価も高い右上のエリアに位置する項目は、本専攻の「強み」と考えられる。満足度との相関が高いにも関わらず評価が低い右下のエリアに位置する項目は、本専攻において「優先的に改善が必要」と考えられる。評価が低い項目ではあるが満足度との相関が低い左下のエリアに位置する項目は、「改善の優先度は低い」と考えられる。ただし、個別の不満の内容は十分に検討すべきである。満足度との相関が低いものの高い評価を得ている左上のエリアに位置する項目は、当面は現状を維持していけばよいと考えられる。

#### 3.2.1 本専攻の「強み」

令和4年度のデータに基づいてみると、本専攻の大きな「強み」(評価4.5以上)は「シラバス整合性」「グループワーク」「カリキュラム」である。本専攻の授業が体系立って編成されていることが、学生個々の学力の向上や資質・能力のアップにつながっていることが実感されていることは非常に大きな強みである。また、グループワークによる学習についても学生からは本専攻の特徴として高く評価されているものと言えよう。

#### 3.2.2 「優先的に改善が必要な項目」

他方で、本専攻において「優先的に改善が必要な項目」としては「資料」「説明」「理解促進」「時間外対応」「学習管理システム時間外」が挙げられる。特に、「資料」「説明」「理解促進」は密接に関連して満足度に繋がっていることもあり、理解促進に繋がるような方向での説明・資料の充実が求められるであろう。また授業時間外における対応についても、学生が重視している点には留意したい。



表3-2: 満足度と各項目の相関係数および評価の平均値

項目	全体満足との相関	評価の平均
カリキュラム	0.671	4.511
学力・資質・能力	0.742	4.438
シラバス整合性	0.732	4.501
理解促進	0.764	4.328
説明	0.728	4.226
資料	0.740	4.258
グループワーク	0.656	4.560
ディスカッション	0.582	4.392
時間外学習	0.441	4.393
シラバス時間外	0.701	4.380
学修管理システム時間外	0.672	4.313
事前課題	0.408	4.054
事後課題	0.556	4.294
コメント	0.521	4.072
時間外対応	0.693	4.295
シラバス内容	0.705	4.426
学修管理システム内容	0.678	4.364
シラバス成績	0.676	4.389
学修管理システム成績	0.672	4.348
満足度	1.000	4.371

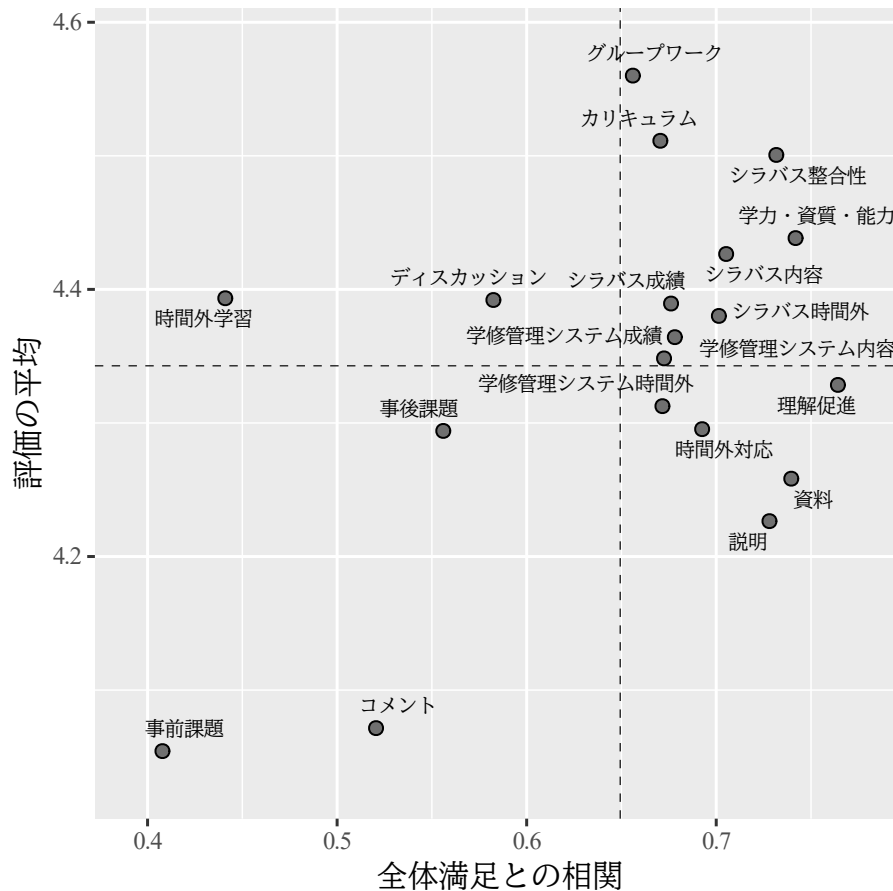


図3-3: 影響度－パフォーマンス・マトリクス

## 4. 各科目の成績分布

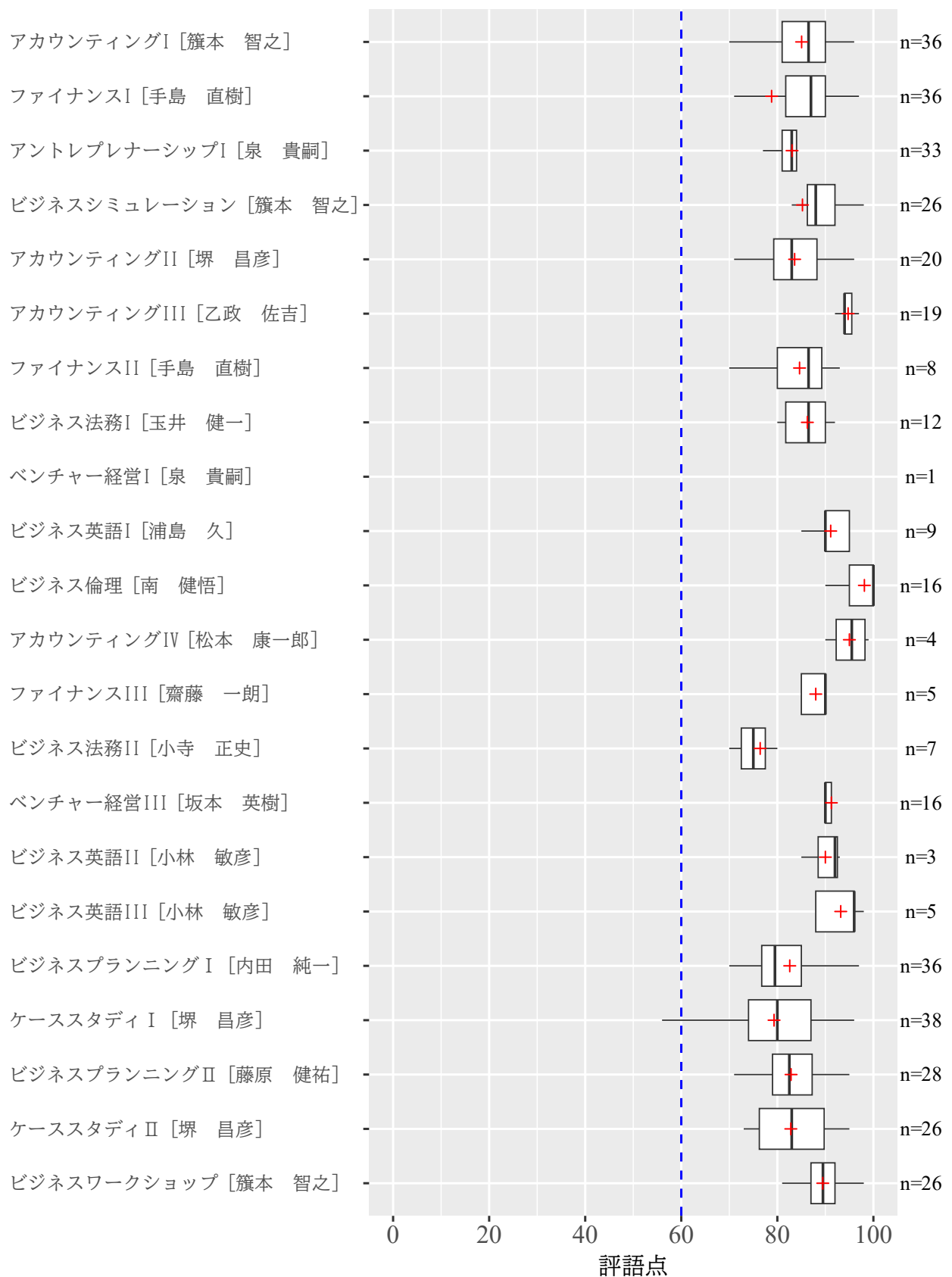
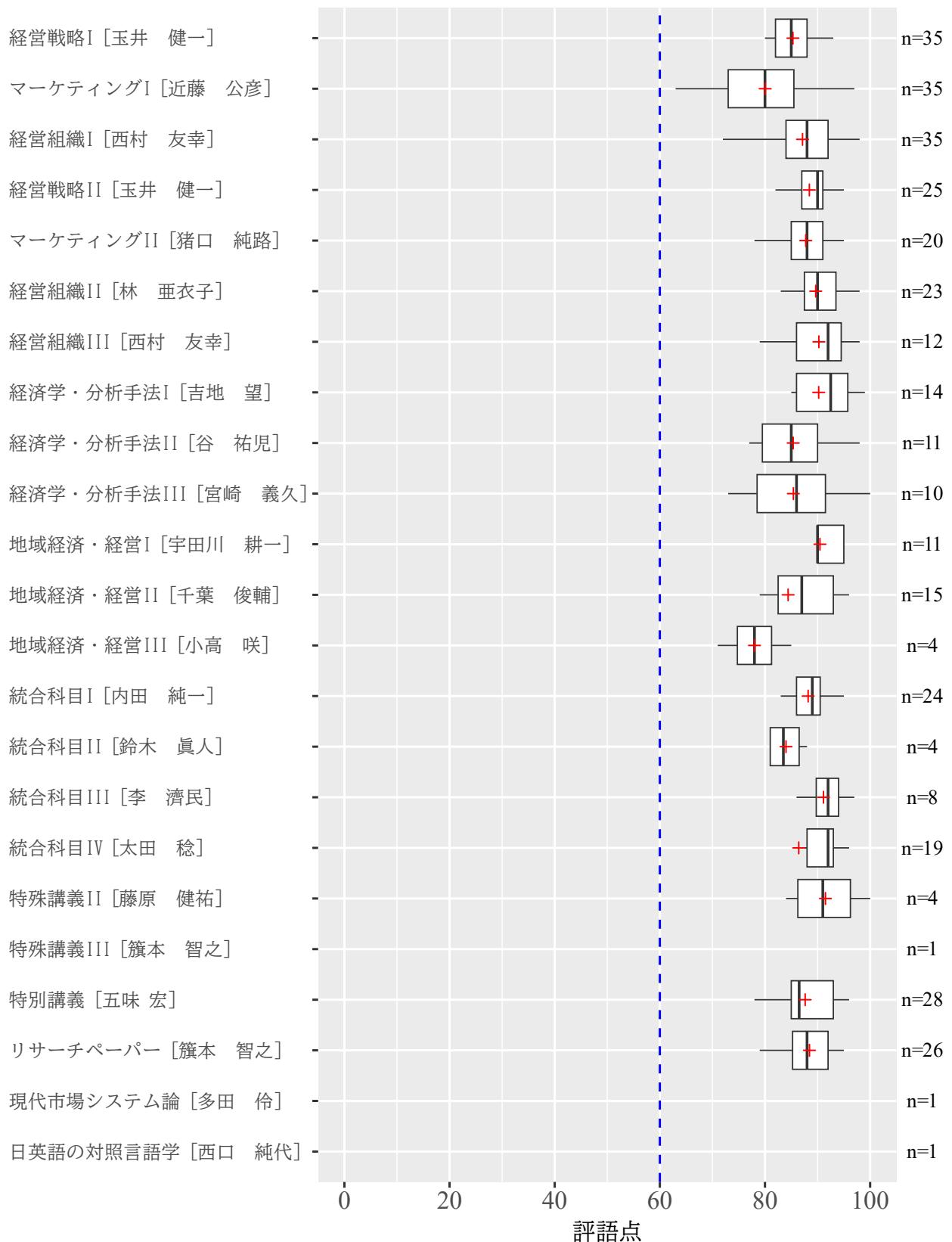


図4-1: 各科目の成績分布 (1)

- ※ 受講者数が一人の科目については成績分布を示していない
- ※ プラス記号は平均値を示す



※プラス記号は平均値を示す

図4-2: 各科目の成績分布 (2)

※ 受講者数が一人の科目については成績分布を示していない

※ プラス記号は平均値を示す







## 6. まとめ

### 6.1. 分析結果のまとめ

今回のアンケート調査と分析を通じて、以下の点が明らかとなった。

- 。アンケート回収率が95.7%と、前年度を上回った。昨年度からの試みである大学のWebアンケートシステムの利用や、回答の利便性を向上・メールによる未回答者への督促など調査方法の改善の効果が影響したものであろう。また、今年度からは多くの科目で対面授業に戻ったが、回収率の状況からみてWebアンケートシステムの利用は対面形態の授業においても有効であるものと考えられる。
- 。全体の満足度は平均値が4.37となり、高い評価を維持している。しかしながら評価項目全てにおいて前年度から下落したことで、説明・資料・コメントにおいてネガティブな評価が全体からの比率は小さいながらも明らかに増加したことは注意を要する。説明・資料については、最終的な満足度との相関も高いことから特に注意が必要である。他方で、高い評価が得られた部分については、高評価が得られた理由の把握と共有により、今後も高い評価を得られるような授業の設計・運営を行なっていく必要がある。
- 。本専攻の強みは、「シラバス整合性」「グループワーク」「カリキュラム」である。本専攻の授業が体系立って編成されそのことがシラバス等で明示されていることは学生に高く評価されており、この点は今後も維持していくべき点であろう。また、グループワークによる学習が本専攻の特徴として高く評価されている点も今後の授業設計において考慮することが望ましいであろう。
- 。「優先的に改善が必要な項目」として重視すべきは「資料」「説明」「理解促進」である。「資料」「説明」「理解促進」は密接に関連して満足度に繋がっていることもあり、理解促進に繋がるような方向での説明・資料の充実が求められるであろう。これらの点については高評価を得た授業における工夫やノウハウを共有し、今後の授業設計・運用に活かしていくことが望ましい。
- 。なお、今年度は多くの科目で対面授業を復活させたこともあり、各種の評価において2年間の間に確立したオンライン授業からの切り替えが影響した側面は否めない点には留意すべきである。

## 授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価（令和3年度後期科目）

科目区分	科目名	担当教員
基本	ファイナンスⅠ（コーポレートファイナンス）	手島直樹

今後も、最新のケースを取り上げながら、コーポレートファイナンスの骨格となる内容を授業の対象としていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営戦略Ⅱ（イノベーション戦略）	玉井健一

受講生の自己学習を促進するため、講義中は答えを示さず事後的に解答を与えていたつもりであるが、質問に対する答えを示さないというお叱りがあった。この点についてコミュニケーションギャップがあると思われるので、原因を究明し対応することとしたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	マーケティングⅡ（市場志向経営）	猪口純路

授業を通じた学生とのやりとり、授業評価アンケート、最終課題の出来栄等等を鑑みるに、授業目標は凡そ達成できていると自己評価している。

課題が残るとすれば、「3 市場志向に関する調査と分析の演習」に関して SPSS が全員に行き渡らないことで、統計的分析の理解度に関する実感に差があることだと考える。

しかし、全学生に SPSS を準備することは現状では困難なことから、受講生がなるべく安価かつ現実的に SPSS を利用できる方法も紹介しながら、受講生本人がその気になれば利用できる環境づくりについて配慮して、次年度の授業に臨みたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営組織Ⅱ（問題解決能力の開発）	林亜衣子

課題解決に必要な思考力と、組織にまつわる課題解決に不可欠なスキルを身に付けていただくための科目です。知識や理論を学ぶだけではなく、実際に”活用する”、”実践する”ことに重点を置いています。心理学を含む異質な点も面白味の一つです。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	アカウンティングⅡ（コストマネジメント）	堺昌彦

ビジネススクール（標準的な受講生として実務家かつ非会計専門家を想定）における実践的な原価計算科目の実現という観点で、原価計算の基礎的な概念・技法を、ビジネス上の様々な局面で活用するための知識の習得に焦点を当てて授業設計を行った。計算技法の習得に大きな時間をとられ原価情報の活用について学習する時間が減ってしまったこともあり、より効率的な計算技法学習の工夫とともに原価情報の活用についてより学ぶ時間を確保できるよう改善に努めたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ビジネス法務 I (ビジネス法務の基礎)	多木・國武・小林 (友)・竹村・片桐・南 (知)

オムニバス方式の講義を採用することで、法律に関わる異なる専門的知識を包括的に提供することができた。この結果、受講生は多様な視点から法的判断に関わる見方や考え方を学習できたと思う。今後は、法律の各専門性の関連性や統合性を意識し、より実践に即した講義を展開していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経済学・分析手法 II (ビジネス統計分析)	谷祐児

概ね良好な結果が得られているが、ディスカッションやフィードバックなどをより充実させることで本講義で取り上げているテーマへの理解を深めてもらえるようにしていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ベンチャー経営 I (企業家精神)	瀬戸篤

参観教員にも評価を頂いたが、読む、書く、話す、は、経営の世界で必須の教養ないしリテラシーである。現に、アマゾン社内の会議では PPT による説明は禁止され、あらかじめ文章によるレジュメ事前配布が不可欠と聞く。その理由は、話すためには、書いて論理が整っていなければならないし、その論理力は読むことによってのみ身につくためだ。

現代のリテラシー教育の主眼としてパッドなどを用いた単純な選択回答が求められるが、これに十分答えるためには、まず本を熟読し、レジュメを作成し、そのプリントを全員に配布して読み上げるクラシックなゼミ研究指導が不変である。たとえ、専門職で職業人生を終わろうと、経営職に就こうと、あるいは創業者になろうと、こうした力なしに他者を説得できる論理力は短時間では決して養われない。商大の少数ゼミ教育の伝統が、その効果を如実に物語っている。願わくは、ビジネススクールでもこうした教育が継続されんことを期待する。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営 II (北海道でのビジネス創造と地域経営)	千葉俊輔

専門家による RESAS 解説の実施、リモート授業のなかジャムボードを用いたディスカッションの導入や事後課題に対する丁寧なコメントと意見交換に務めたことから、履修生の参加意欲や理解度が上がったと評価している。次年度は、これらを踏襲しながらも、新たに最近のビジネス創造の情報を提供するなど更に工夫していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ビジネス英語 I (初級ビジネス英語)	浦島久

今年は Zoom の使い方にもかなり慣れて授業に少し余裕がでてきたと思います。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目 III (グローバルマネジメント)	李濟民

おおむね目標していたことは達成できた。英語のテキストを原文で読むことで、国際経営の理論と実態をより深く理解することができたさらにモジュール2以降のケース分析については受講生自ら選択したものを発表し、討論することで、より深くコミットしてもらうことができた。受講者の人数にもよるが、これからもこの様な形式で進めていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目 IV (戦略的 CSR)	太田稔

亡き山下先生から引き継いだ戦略的 CSR は 2022 年度で終了します。  
 本年度は、エンカルアントレプレナーシップと戦略的 CSR の双方を受けている学生もいるかと思いますが、  
 MBA にこれらの科目が必要な理由を感じ取って頂けると幸いです。  
 短い時間ではありましたが、ありがとうございました。

科目区分	科目名	担当教員
発展	アカウンティング IV (国際会計)	松本康一郎

シラバスに記した3つの授業目的 (☑企業会計基準においてグローバル・スタンダードとしての地位を確立している「国際財務報告基準 (IFRS)」について、各国・各地域の会計基準との共通化と、各国・各地域における IFRS の適用に関するこれまでの展開を理解する。☑さらに、IFRS それ自体がどのような経緯と仕組みにおいて策定されてきたのかを理解する。☑ IFRS が日本の企業会計制度や企業経営に与える影響を検討する。) は、概ね達成されたと思う。ただし、授業目的を達成するうえにおいて、ディスカッションの時間をもう少し取ればよかったと思う。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ファイナンス III (金融機関マネジメント)	齋藤一朗

本授業は、大括りに二部構成をとっています。モジュール 1~3 では、金融取引の意義や金融取引に伴う諸々の困難を議論の口火切りとして、銀行がそれらの困難をいかにして解決し資金を円滑に融通するのかを、銀行のビジネスモデルに即して解説します。ここでは、銀行のビジネスモデルを理解するための基本的な視座を養うことを到達目標とします。なお、モジュール 1~3 の授業では、初学者の履修も念頭に置きながら、主として講義形式によって進めています。

モジュール 4~8 では、銀行のビジネスモデルに関わる理解を踏まえて、銀行財務の分析 (Excel のシートでフォーマットはお渡しします) やマクロ経営環境や競争環境に関する定性的な分析をグループワーク形式で行っています。個別具体的な銀行や信用金庫を分析の俎上に載せ、収益性や健全性を財務的な側面から把握するとともに、PEST 分析や業界構造分析、SWOT 分析など既習の分析フレームワークを援用して、銀行経営の実態を把握するとともに、そこに内在する経営課題とその打開策について検討を加えます。したがって、モジュール 4~8 の到達目標は、銀行経営が直面する経営課題を見だし、戦略的な打開策の構想力の涵養することに置かれています。

今年度は、新型コロナウイルスの感染状況から、ハイフレックス方式によって授業を行ってききましたが、モジュール 1~3 の事後課題 (小テスト形式) によって、現代金融を理解する上で必要な概念を概ね理解していることが確認できました。モジュール 4~8 では、少人数クラスのため、受講者とのコミュニケーションを十分にとりながら、ケース分析をステップバイステップで進める

ことができました。総合的にみて、本授業の目的・目標は達成できたものと思慮されます。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ベンチャー経営Ⅲ（アントレプレナーの起業戦略）	坂本英樹

1. 経営理論を整理した上でのディスカッション, 事前事後課題へのニーズを充足するための取り組みを検討する。

科目区分	科目名	担当教員
発展	特殊講義Ⅱ（地域医療マネジメント）	李・猪口・北川・藤原 他

当科目の目標は、できるだけ地域医療を広くとらえて医療マネジメントだけではなく、歯科診療、介護サービス、ソーシャルビジネスを含む地域医療サービスの創出などヘルスケア全般におけるトピックスを毎回それぞれの分野を代表する専門家を招いて講義及びグループワークを実施することであるので、他の科目とは大きく異なる。授業運営をさらにスムーズに行うことで、アントレの目玉講義になることを期待する。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ビジネスプランニングⅠ	内田・齋藤・藤原・太田（稔）・井馬・奥田

#### 1. 目標の達成状況とその改善策について

本講義の「到達目標」については、シラバスに以下のようにまとめている。

1 各種の分析フレームワークやスキルを、リアルなビジネスプラン策定の場で「合理的・整合的に用いる」センスと実践的な能力を身につけること。

2 実現可能性が高く、他者に対する強い説得力を有するプランを策定し仕上げるための「練り上げ/練りこみ」プロセス(プランニングのための分析・検討・立案をくり返すことによるプランの品質向上のプロセス)の必要性を理解し習熟すること。

以上で引用したように、本講義の到達目標は、二点の大項目としてまとめられているので、以下ではその達成状況について自己評価しておきたい。

まず、二点の到達目標そのものについては、多くのチームが受講生同士のチームプロジェクトにおいて、一通り身につけることができているものと、我々は成績評価の過程において(各チームの課題を精査し、改善コメントを加える作業を4回にわたって続けるなかで)認識している。

本科目では、上記目標の達成を狙いながら、「事業計画書を策定」できる能力を高める目的で実践科目らしく、外部ゲスト企業の協力を得るなどして実務に即した形で講義が運営されている。その結果として、本講義に続くビジネスプランニングⅡへの橋渡しという、カリキュラム設計とも合目的であると自己評価している。

その上で、ある程度は「目標を達成」できたという前提で、その要因について振り返っておきたい。

二大目標のうちの1については、4回にわたるモジュール進行のうち、それぞれ4回の講義の事後課題に対する指導的応答を通じ、複数の教員から添削という形でフィードバックを与えていることが成果をあげた理由として大きいと思われる。これにより、自分(のチーム)が出来ていない部分を可視化され、改善につなげられるからである。

一方、二大目標のうちの2については、本年度の場合、実企業の新規事業課題に取り組む演習に取り組ませるだけでなく、当該企業の役員クラスを外部ゲスト講師として招き、フィードバック

コメントを得たことが有効に作用したと我々は自己分析している。これにより、学生たちが自分(のチーム)の構想した事業計画が実務家にどれだけアピールしたのかを実感することができ、いわゆる「練り上げ」を行うことの意味を知ることができたのではないかと思われるからである。

## 2. 学生による評価結果を受けて次年度への改善点

本科目の「科目別評価シート」において、とくに批判的なコメントとしては大きく二点あったので、以下に、要点のみにまとめておく。

- 他の実践科目に比べ、受講する意義を感じない講義
- 払っている授業料に対してあまりに得るところの少ない講義

上記のようなコメントが果たして、単独のものであったのか複数名からのコメントであったのか、明確ではないが、本授業について不満を持った受講生がいたということは事実であろう。

とはいえ、それ以外に多くの肯定的なコメントを含む前向きな評価が得られているということも申し添えておきたい。

(評価の数値から見る本科目は、選考全体の平均値とほぼ同程度であった)

それでは、上記の結果を受けて、我々が次年度へ向けてどのような改善をはかるかについて以下に端的に記しておく。

上記の批判的コメントに対しては、他の科目との比較の上での意見や、授業料うんぬんというコストパフォーマンス面での意見については、いずれもあまりに主観的な内容であるため、改善の方向性を正直見だしにくい。しかしながら、本講義では次年度より担当講師の数が増え、よりきめ細かなフォローができるようになるため、授業時間内はもちろん、授業時間外の指導機会も従来より増やし、科目としての満足度を高めるべく努力する所存である。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ケーススタディ I	堺・近藤・西村・北川

多角的な視点から企業を総合的に分析し戦略立案スキルと能力を習得することを目的とした本科目であるが、継続する課題として、適切なケース作成(改訂)と適時適切なフィードバックを行う体制の構築が存在する。基礎的な分析スキルの習得に繋がり、また学生の関心と経営管理知識の理解の深化に繋がるようなケースを投入できるようなケース教材の開発と、それらを活用してより効果的効率的な学びに繋がるような授業運営の工夫に努めたい。

科目区分	科目名	担当教員
ビジネス ワークシ ョップ	ビジネスワークショップ	李・猪口・簗本・瀬 戸・後藤(英)・奥田

受講生全員が最終レポートを無事提出できたという意味で大きな成果があった。ただし、できるだけフィードバックを早くし、対面でのディスカッションを行うことで、レポートを仕上げるためのさらなる工夫が必要と考える。

科目区分	科目名	担当教員
ビジネス ワークシ ョップ	リサーチペーパー	李他専任教員・後藤 (英)・奥田

受講生全員が最終レポートを無事提出できたという意味で大きな成果があったが、できるだけフィードバックを早くし、対面でのディスカッションを行うことで、レポートを仕上げるための

さらなる工夫が必要と考える。これからも教員全員の前でOBSで学んだことの集大成として、ケース分析やビジネスプランを発表するスタイルを続けていきたい。

## 授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価（令和4年度前期科目）

科目区分	科目名	担当教員
基本	経営戦略Ⅰ（経営戦略）	玉井 健一

事業戦略面の講義は、理論と結びついたケーススタディを行うことができた。ただ、全社戦略については、プロダクトポートフォリオなど、もともと意思決定者の判断にゆだねられるという恣意的な側面はあるものの、その実践的な活用方法などの享受が書けている部分があった。来年度は、この点を改善しよりよい講義ができるよう心掛けたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本	マーケティングⅠ（マーケティングマネジメント）	近藤 公彦

学生アンケートにおける20の調査項目のうち、「シラバス整合性」「カリキュラム」「理解促進」等、13項目において専攻平均を上回り、高い評価を受けている一方、「学修管理システム時間外」「満足度」等、7科目において全体平均を下回っている。全体としては授業効果が達成されていると言えるが、専攻平均を下回った項目については、改善を図るべく、工夫していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本	経営組織Ⅰ（組織行動マネジメント）	西村 友幸

アンケート評価項目のうち、特に「説明」は、専攻平均と比較してスコアが低く、また「満足度」との相関が高い要素とのことなので、改善が必要である。分かりやすい説明のためには資料の工夫も大事である。「資料」のスコアは専攻平均と比較してやや低い程度だが、あわせて見直しを図りたい。

一方で「コメント」項目のスコアが良好であり、自己の強みととらえてこのスキルの維持・強化に努めたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本	アカウンティングⅠ（財務会計）	籾本 智之

コロナ禍によりグループワークが困難になり、一方通行的な授業方法をとらざるを得なかった。その結果として、クラス内のコミュニケーションが不足してしまい、初学者の学習不安を払拭することが出来なかったかもしれない。授業方法を見直し、学習効果の高いものを模索していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本/基礎	ビジネス倫理（基本） / （基礎）	南 健悟

本授業に対する学生による評価において、2点ほど重要な指摘があった。この授業では、学生からの評価として、教員の知識の多さがあり、ポジティブな内容として捉えているものの、他方で、1学生の意見や発言に対するコメントやフィードバックの少なさや、2学生同士のディスカッションの機会が少なかったことが指摘されていた。企業倫理に関する授業は、倫理に関する基礎的知識や企業経営における法的知識が要求されることもあり、一方的な講義となりがちであり、コメントやフィードバック、そして、ディスカッションの機会が少なかったことは反省すべき点であるとする。授業の時間との関係もあるが、できる限り、具体的な事例を素材としつつも、その背後にある基礎理論や法的知識を講義しながら、より具体的な解決方法については、受講生同士の議



論等を踏まえて、最終的にフィードバックできるような体制で講義を行う必要があると考える。

科目区分	科目名	担当教員
基本/基礎	アントレプレナーシップ I (エシカル・アントレプレナーシップ) /ベンチャー経営 I	泉 貴嗣

授業を受講したことにより、経営者である受講生が自社の SDGs 推進のために金融機関の支援を受けた、土業である受講生がサステナビリティを重視する企業に転職したなどの報告を受けたことは、自らの授業の実践性を確認できたと共に、教員としての冥利に尽きる。

エシカルは従来の経済性一辺倒のビジネス観から脱却し、ビジネスのプロセスにおいて ESG 問題-環境と社会、人権に関する問題-を抑制・解決し、社会と企業のサステナビリティを目指す考え方であり、急速に発展しているビジネス領域である。また、このような考え方は ESG 問題が深刻化する現代社会にあっては上場/非上場、老舗/スタートアップ、大企業/中小企業、そして業種を問わず必要となる。そのため、今後も現実のエシカルビジネスの動向をつぶさに捉え、よりの確に授業に反映させると共に、知識の伝授だけでなく、より受講者のインテグリティを高めるような授業手法を研究し、エシカルな MBA、エシカルなビジネスや組織を創造できるアントレプレナー/イントレプレナーの育成に尽力してゆきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営組織 III (戦略的人的資源管理)	西村 友幸

3年ぶりに対面授業を実施した。このことが受講者の授業評価に反映された可能性がなくはないと考えられる。評価結果に慢心せず、向上心を持ち続けたいものである。受講者からの要望にもあったとおり、講義内容やケース教材のアップデートも忘れてはならない。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	アカウンティング III (予算管理と業績評価)	乙政 佐吉

授業の目的を達成する上で、レクチャーによる基本的事項の理解、ケース・スタディによる考察、事後課題による内省という授業の進め方自体に問題はなかったと考える。しかしながら、グループワークやディスカッションの方法には改善の余地が認められる。実践と反省を繰り返しながら改善していきつつ、来期以降も、クラス内の対話・討論を活発化できるよう努めていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ファイナンス II (企業価値経営)	手島 直樹

グローバル水準の MBA ファイナンスの授業を今後も行っていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経済学・分析手法 I (行動意思決定の基礎)	吉地 望

行動意思決定の基礎を受講された学生さんから、行動意思決定や行動経済学について学ぶ意義について一定の評価を頂きました。

その一方でレジュメの配布タイミングなど、事前にしっかり学んでから講義を受けたいというニーズに十分に答えることができていないと反省しております。

来期の開講にむけて、受講生からの助言を踏まえ、学術的内容を残しつつも、より実践的な内

容を含めた学びとなるように改善を重ねていきたいと思ひます。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営 I (プロジェクト・マネジメント)	宇田川 耕一

受講生が事前課題・事後課題をほぼ締切を守って提出したことや、出席率が高かったことで、授業内のディスカッションが闊達に進んだ。対象者 11 人中 10 人が「秀」評価であり、「プロジェクトマネジメントの基礎的な知識と周辺知識が学習できました。非常に学びの多い授業となりました。」「体系的な知識に加え、参加者の実務者としての経験や意見を上手く引き出しながら授業をファシリテートしていただいていた。相互の意見交換と先生のアドバイスにより、複層的な視点を身に着けることが出来ました。」など、自由記述でも高い評価をいただいた。今年度も受講生の要望やポテンシャルを注意深く見極めながら、基本的には同じ方向性で進めていく予定である。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営 III (北海道経済の課題)	小高 咲

- 学生による評価結果を踏まえ、学修管理システムも活用した事前・事後課題の充実と、授業との紐付けの明確化を心掛ける。
- ゲストスピーカーによる講義が一部聴きっぱなしになってしまったため、より一層の有効活用と、通常授業との関連付けを図る。
- 最終レポート案のイメージを早めに固め、それを念頭に講義を聴くほうが効果的だったのではないかと考える。来年度は、その点を工夫したい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目 I (サービスマネジメント)	内田 純一

本授業における「基本科目で扱った経営理論の土台の上に、サービス理論が積み重なっていくイメージを受講者が持てるよう講義を展開していく」という目的については、経営組織論、経営戦略論、マーケティング論の復習となる知識を講義冒頭部でまとめ、講義中でより発展的な理論を紹介することで理解を促進させたほか、一部の会計知識が本科目において応用できることを示すことができた。目標であるビジネスモデル構築能力や生産性向上のための分析スキルについても実習型の授業を通じて、各自が体得したと思えるようインストラクトできたと自己評価している。

所期の目的・目標を達成できた事項として特筆できる点は、目的にあげた「基本科目で扱った経営理論の土台の上に、サービス理論が積み重なっていくイメージを受講者が持てるよう講義を展開していく」のうち、とりわけ理論の積み重なりイメージを抱かせることに成功した部分である。その要因としては、講義初日の全体デザインの説明、各講義日冒頭で関連する経営理論を復習すること、講義最終日で全体デザインと授業実施状況の対応関係を示すことなどが貢献したと考えている。

なお、本科目の学生による評価結果は、全体科目平均と比し、本科目(対象科目)平均がほとんどの項目で上回っている。下回った項目は、「グループワーク」「時間外学習」「事後課題」の三つのみである。そのため、次年度はグループワークについては授業中のそれを次年度は増加させるとともに、時間外学習と事後課題の量を過年度よりも増量するよう改善したい。

また、授業参観は2名の教員から受け、それぞれ「一見、ISO とサービス、企業成長は関連しないことのように思われるが、組織ルーチンや組織学習、サービス設計など、経営学の主要概念を使って統合的に事例分析がされており、統合科目として非常に質の高い授業内容」、「この領域に

についての知識のない学生の理解が進むように、典型的な事例の提供を行うことで学習を促進することができている。また、サービス業の理論が混乱なく理解できるように、学生にとってなじみのある製造業の議論を使いながらサービス業の理論に接近している点が特に優れている」といった評価を得ている。

元来、本授業は、各領域に及ぶ経営理論の統合的な科目内容であるため、全体デザインを明示して、現在の学習位置を示すほうが教育効果があがる(受講者が学習の意義を理解できる)ことが受講者アンケートの結果として、分かっている。本年度は、講義冒頭でそれを示し、講義終盤でその全体図を再び示して、対応結果を明示した。ただ、こうした明確なガイドはシラバスには反映していなかったため、来年度からはシラバス上にも基本科目のどれをさらに発展させた講義内容になるかなどをより詳細に明示することにしたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目Ⅱ(企業変革とリーダーシップ)	鈴木 真人

リーダーシップに関する正解は一つとは限りません。「企業変革とリーダーシップ」というテーマの当方の授業においては、テキストをどれだけ理解したか、あるいは、計算や理論をどれだけ正確に運用できるようになったのかなどのひとつの“正解”求めるのではなく、立場や場面によって発揮される様々なリーダーシップに対する個人の理解を深めて頂きます。

このような授業の満足度を高めるために、講師と学生はもとより学生間のコミュニケーションが重要と考えています。そのため、グループワークを充実させるとともに、授業中の質疑回数を増やす、求めに応じて時間外授業を実施する、レポート返却時のコメントをより学生の個別事情に即したものとするなどの対処をしていきたいと考えています

科目区分	科目名	担当教員
発展	ビジネス法務Ⅱ(知的財産マネジメント)	小寺・富田・太田(清)

知的財産の概要, 知的財産の取得の概略, 知的財産の活用方法及び知財紛争の対応について, 知財の実務に即して, 具体的な事例に基づいて講義を行った。

真面目に講義を受けた受講生においては、これまで法律や知的財産になじみがなかった場合でも、知財に関して実践的な理解がある程度できたと思われる。

科目区分	科目名	担当教員
発展	特殊講義Ⅲ(Demola program)(Aクラス)	籾本・玉井・猪口・金子

長期履修者にとって質の高い学習機会を提供できたと考える。

科目区分	科目名	担当教員
発展	特別講義(ジャーナリストの視点からみた企業変革)	五味 宏

記述なし

科目区分	科目名	担当教員
実践	ビジネスプランニング II	藤原・内田・齋藤・ 泉・太田（稔）・井馬・ 奥田

本講義は専門の異なる実務家教員が担当しており、学生のコメントでは各先生からの専門的なアドバイスが非常に参考になったとの意見があった。一方、学生自身の力によって思考と行動を行う自発性を引き出すことが重要と考え、レクチャー形式の授業時間を最小限にしたことが一つの要因となり、学生の習得度に差が生じてしまったことは反省点である。教員側から学生への問いかけを増やして習得度を逐次確認する等、授業の運営方法を引き続き検討し、より良い方法を導入することとしたい。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ケーススタディ II	籾本・玉井・猪口・堺

ケースを分析し戦略を立案するスキルの習得に関しては着実に実現できているものとする。しかしながら受講生へのフィードバックについては確実にタイムリーに行うために教員負担を見直す必要がある。また、財務評価については、確実なスキル習得に繋がるよう基礎的な考え方の習得に焦点を当てていきたい。

# 第4章 令和4年度 CGS教育支援部門の活動状況

## 令和4年度 CGS 教育支援部門の活動内容

4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期授業開始：遠隔授業サポート</li> <li>・（学部）新入生アンケート</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（アントレ）FD研修会</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（アントレ）授業参観</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（学部）学科単位での授業改善の取り組み</li> <li>・（学部）授業改善のためのアンケート</li> <li>・（アントレ）前期授業評価アンケート</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道 FDS D フォーラム（主催：北海道地区 FD・SD 協議会）</li> <li>・東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会</li> <li>・札幌市立高等学校の高大連携協定に係る連携事業</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後期授業開始：遠隔授業サポート</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FDワークショップ「データで見る小樽商大生～入学から卒業まで」開催</li> <li>・学生論文賞第一次審査（プレゼンテーション）</li> <li>・（アントレ）FD研修会</li> <li>・（アントレ）後期授業参観</li> <li>・（アントレ）修了生調査</li> <li>・（大学院）FDアンケート</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（学部）卒業生アンケート調査実施（2012年度、2019年度卒業生対象）</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生論文賞最終審査（2月：結果発表）</li> <li>・（学部）授業改善のためのアンケート</li> <li>・（学部）卒業年次生向けアンケート</li> <li>・（アントレ）後期授業評価アンケート</li> <li>・（学部）アセスメントテスト（GPS-Academic）の実施</li> </ul>
2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学科単位での授業改善の取組」報告書</li> </ul>
3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生論文賞表彰式</li> <li>・FD活動報告書作成</li> </ul>

## 令和4年度 FDワークショップ 「データで見る小樽商大生～入学から卒業まで」

開催日時 | 令和4年11月2日(水) 15時00分～16時45分

参加者数 | 73名 (小樽商科大学: 59名, 帯広畜産大学: 3名, 北見工業大学: 11名)

令和4年度のFD活動として、FDワークショップ「データで見る小樽商大生～入学から卒業まで～」を教学IR室との共催で、開催した。このワークショップは、学生の入学時から在籍中、卒業(後)に至るまで、入学試験(学力検査結果)や履修科目の成績データや新入生/卒業生を対象とした種々のアンケート等から得られた調査データを基に、本学の学生像を客観的に把握し、今後の授業やゼミ等の教育活動に活用されることを目的に開催した。

当日は、話題提供として、教学IR室の西出崇准教授が、これまで教学IR室で集計した各種アンケート等の集計結果の概要について、報告し、それを基に、教員間でディスカッションを行った。なお、本ワークショップは、本学だけでなく、帯広畜産大学、北見工業大学からも参加があった。



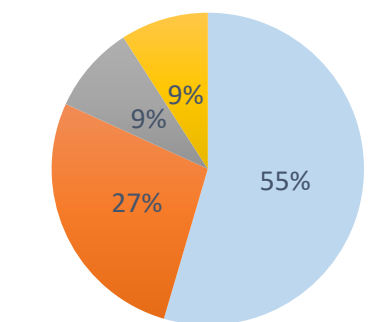
会場の様子



説明する西出崇准教授

### <参加者のアンケート結果から>

Q. 今回のFDワークショップに参加して良かった (n=22)



■ とてもそう思う      ■ そう思う  
■ どちらともいえない      ■ 回答なし

Q. 今回のFDワークショップについての感想をお願いします。(抜粋)

データに基づいた内容であるため、説得力が高かったと思います。また、ディスカッションも活発に行われ、有意義なワークショップでした。

具体的データと参加者の肌感覚・現場感による率直な意見交換が交わされ、学生像が垣間見えた。

各種データの興味深さはもちろん、教員の関心の高さが窺え、非常に有意義な内容であった。普段の業務だけでは、学生の思考や傾向がはっきりとはわかりづらいことが多いので、参考になった。

令和4年度  
CGS教育支援部門スタッフ一覧

教育支援部門運営会議		
教育支援部門長		大津 晶
教育支援副部門長		田島 貴裕
教育支援副部門長		西出 崇
	CGS副センター長 (副学長(教育・入試・国際交流担当))	鈴木 将史
	学部教育開発専門部会長	中村 健一
	大学院教育開発専門部会長	金 鎔基
	専門職大学院教育開発専門部会長	堺 昌彦
学部教育開発専門部会		
部会長		中村 健一
	教育支援部門長	大津 晶
	CGS副センター長 (副学長(教育・入試・国際交流担当))	鈴木 将史
	教育支援副部門長	田島 貴裕
	教育支援副部門長	西出 崇
	学部教務委員会委員長	才原 慶道
		加賀田 和弘
		高橋 周史
		沼澤 政信
		石崎 香理
		石井 登
大学院教育開発専門部会		
部会長		金 鎔基
	大学院現代商学専攻長	中浜 隆
	大学院現代商学専攻教務委員会委員長	多木 誠一郎
		岩澤 政宗
		岩本 尚禧
		平沢 尚毅
		山田 久就
		高橋 優季
専門職大学院教育開発専門部会		
部会長		堺 昌彦
	大学院アントレプレナーシップ専攻長	篠本 智之
		泉 貴嗣
		筈井 俊輔
キャリア教育開発専門部会		
部会長	教育支援部門長	大津 晶
	教育支援副部門長	田島 貴裕
	教育支援副部門長	西出 崇
	CGS副センター長 (副学長(教育・入試・国際交流担当))	鈴木 将史
	学部教務委員会委員長	才原 慶道
	教務課長	高玉 博史
	学生支援課長	勘原 和彦



## 編集

令和4年度小樽商科大学グローバル戦略推進センター教育支援部門運営会議

部門長	大津 晶	(社会情報学科教授)
副部門長	田島 貴裕	(教育支援部門教授)
副部門長	西出 崇	(教学 IR 室准教授)
	鈴木 将史	(副学長)
	中村 健一	(経済学科准教授)
	金 鎔基	(商学科教授)
	堺 昌彦	(アントレプレナーシップ専攻教授)
	----	
	高玉 博史	(教務課長)
	河崎 智之	(教務課特定専門職サブマネジャー)
	藤井 哲之進	(CGS 技術専門職員)

## ヘルメスの翼に—小樽商科大学 FD 活動報告書— 第 15 集

発行日 令和5年7月1日

発行所 国立大学法人北海道国立大学機構

小樽商科大学グローバル戦略推進センター教育支援部門

〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号

TEL : 0134-27-5240 / FAX : 0134-27-5238

E-mail : k-shien@office.otaru-uc.ac.jp